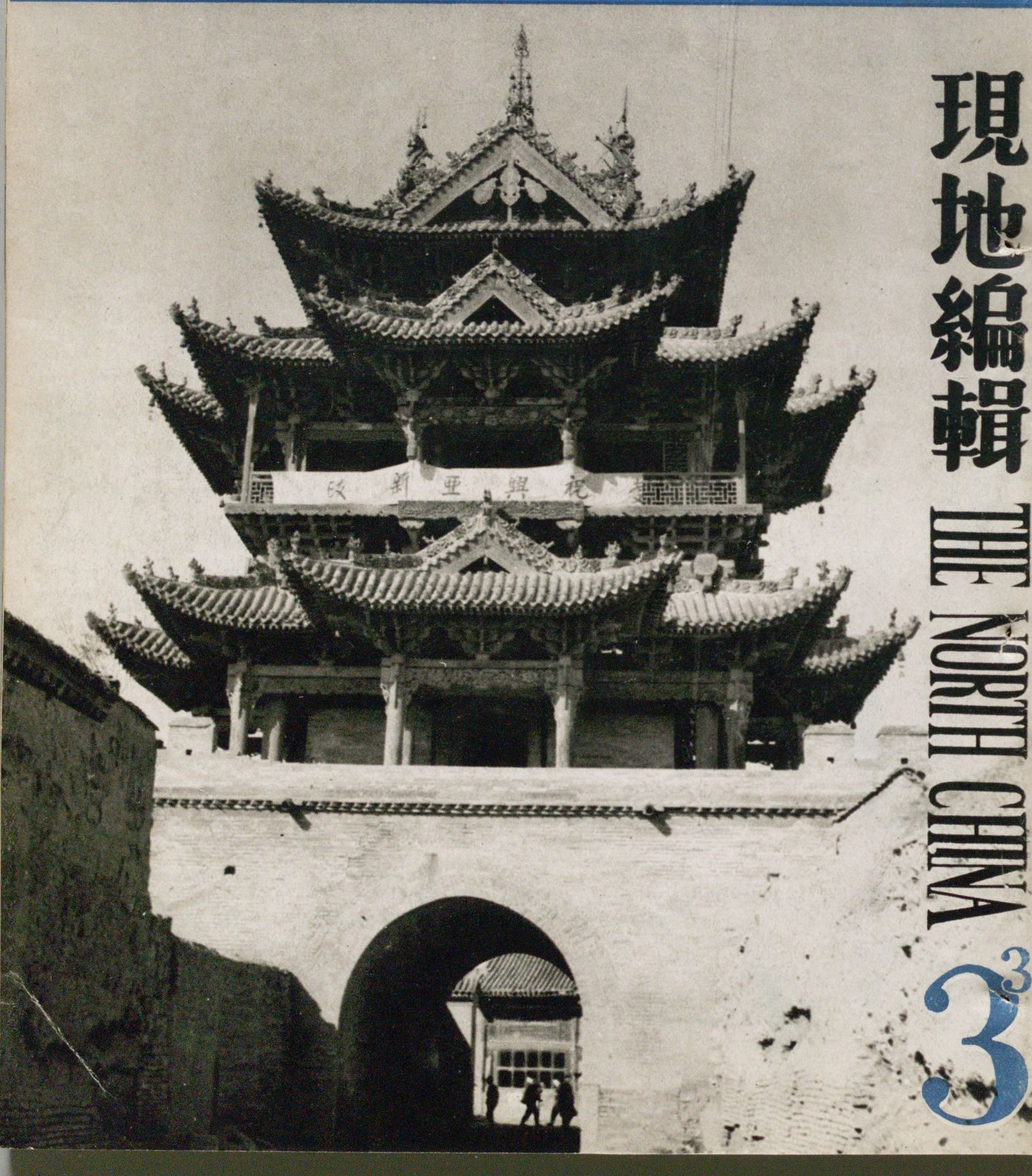
北支



現地編輯

THE NORTH CHINA

3 [3]



北京天安門前にて



連翹

Golden-Ball Trees in Blossom

連翹は支那原産の落葉小灌木で、一名大翹とも呼ばれる。連翹の名は幹と枝とが蔓のやうに伸び連り、早春未だ葉の出でざるに先だつて黄色四瓣の小花を開き、この姿がさながら黄金の長き尾羽を集めたやうにまばゆきばかりの美觀を呈するところから出たものであらう。古來、支那では廣く庭園に培養せられ、又果實は種々の藥用に供せらるるとも謂ふ







少年角力

蒙古角力

Mongolian Wrestling

蒙古人の戸外遊戯はどこか日本と似通つたところがある。すなはち角力、競馬、競弓と云つたやうな物が主で、これは娯樂といふよりも、むしろ蒙古の三大國技といつたはうが適切である。殊に角力は彼等に歡迎されてゐる。蒙古の角力はヂンギス汗時代に始るといはれ、オボ祭や喇嘛廟祭に於けるナイル（宴會）の席上で行はれるものが、一番豪華である。彼等の角力は、蒙古語でバリルドホ……つまり摑み合ふといふ意味で、從つて日本のそれのやうに四つに組み、四十八手の祕術をつくすやうな技巧には乏しいやうである。選ばれた力士達は、日本の土俵入りや角力甚句のやうに、エエイホホイ……と掛聲や手振り面白く角力場に進み寄り、角力はねて打出しとなると、再び賑かに退出する。蒙古の角力の特徴は一定の土俵のないことと、力士がいづれもシヤツに半ズボン、それにカートンカ（羊皮の長靴）を着けてゐることであり、摑む、蹴る、脚と腕を中心に闘ふことで恰度、軍鷄の蹴合ひに似た野趣豐かなものである



力士の服装



盛装せる蒙古の既婚婦人

Scenes of Daily Life in Mengchiang



オラーイホントクトの夕暮

蒙古の生活

廣袤六十萬平方キロの內蒙古には、現在七百萬の住民がゐるが、そのうち生ツ粹の蒙古人は、僅か三十萬足らずである。彼等はいづれも原始的生活をつづけ、水草を追うて曠野を轉々する昔ながらの遊牧の民ばかりである。從つて住宅は移動式の包が多く、一時間そこそこで組立てや取はづし自由となつてゐる。材料は板壁がはりの羊皮や柳條が主で、それに支柱となる丸太棒が十數本必要とされる。しかしこれでも物價暴騰の今日では五百圓を下らないといふから驚く。結婚式や役人の事務等も、盡くこの包の內で行はれる。家族制度は嚴重な家長中心主義で、長男が七歲になると元服に等しい喇嘛僧の洗禮が行はれることになつてゐる。結婚は早婚で、甚しいのは十二、三歲の花婿、花嫁を見かけることもすくなくない。育兒法や出產、葬儀などは盡く原始的で、葬儀の如きは今日なほ屍體を原野に放棄する風葬の惡習が遺つてゐる。郵便物も飛脚がはりの馬が馳り宣傳連絡等も、總べて口傳となつてゐる。宗教は喇嘛敎一色に塗りつぶされオボ祭や廟祭に於ける打鬼（降魔舞踏會）の怪奇な舞踏は、有名である

マニコール・經文が刻れてあり讀經のかはりに廻す



炊事





國士監の琉璃牌樓・北京

Gracefully Constructed and
Beautifully Painted Arches

牌樓



國士監第一の牌樓・北京

北京をはじめ各地で隨所に見かける大小さまざまな牌樓は、聖賢や孝子節婦の頌德碑として造られたもので、『雲輝玉宇』とか『范余氏節孝坊』とか、『孝節』など勁箇な文字の牌を掲げてゐる。はじめの頃は樣式も材料も、日本の鳥居程度の單純なものであつたが時を經るにつれてむしろ裝飾的なものに變化してきてゐる。之を建築的に觀ると興趣深いものがある



刺　　繡

Chinese Needle-Work

生糸の撚りをかける・北京哈達門外にて

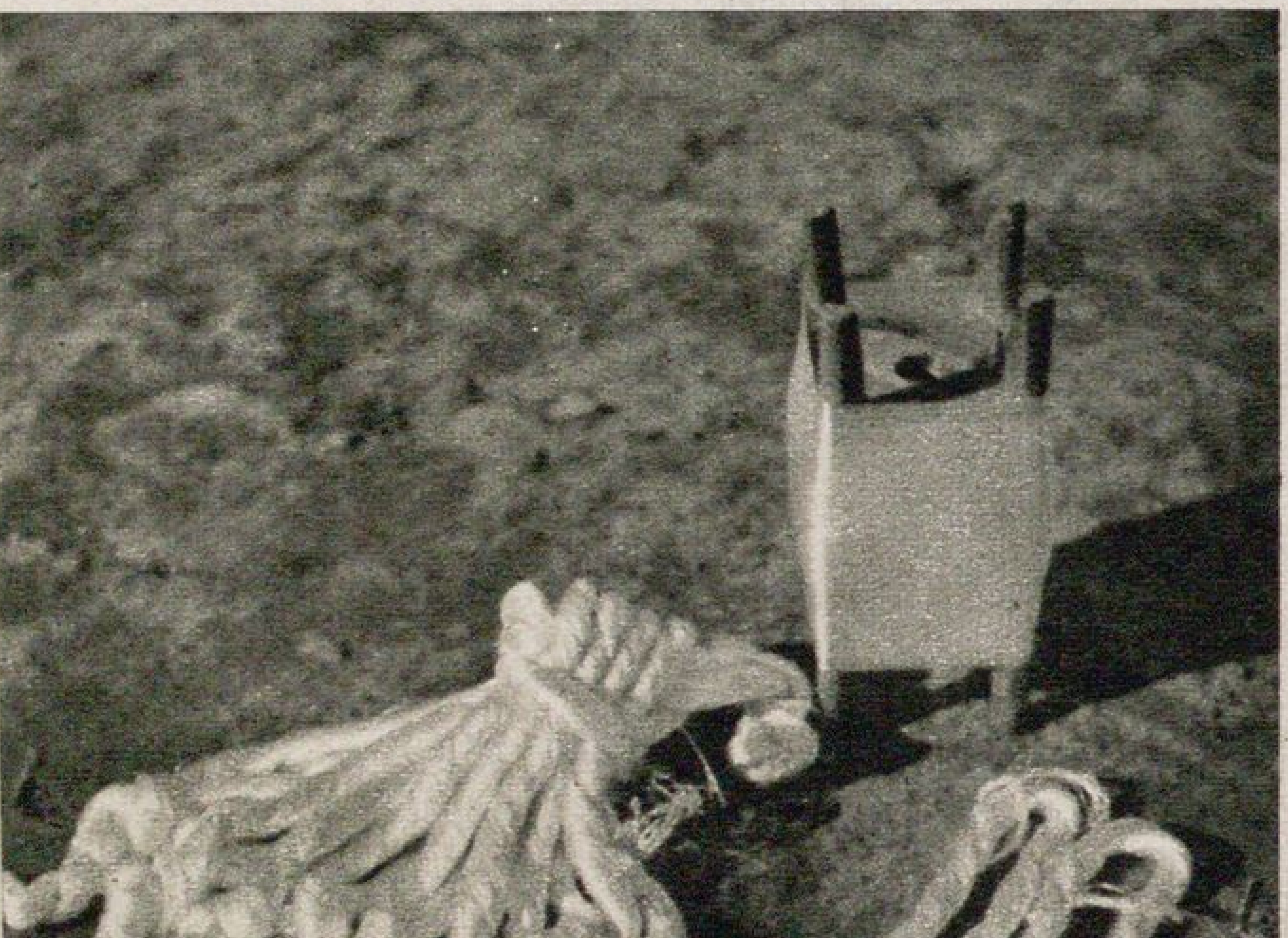




出來上つた糸を巻く



刺繡



製品

紡線

支那の紡線業の起源は甚だ古い。昔から紡線業は支那農村の主要手工業の一つで、木綿と生絲が用ゐられて來た

北京が帝都であつた頃――貴顯富商達の衣服は殆んど生絲が用ゐられ、刺繡や飾物にも使用したのでその販路は甚だ廣く、清朝末期でも北京の紡線業者は數千人を超えてゐたと云はれる

支那に於ける生絲の產地は北支ではなく、江蘇や浙江、主に揚子江一帶が盛んで、これらの地方から現在華北交通によつて運營されてゐる南運河、北運河等を經て北京へ運ばれる

現在北京の紡線業は時勢の波に抗し難く、民國以來衰微の一途を辿り崇文門外一帶に十軒餘の業者が殘つてゐるだけで、前門外や琉璃廠の店頭に並べられてゐる豪奢な刺繡や飾物に昔の殷盛の名殘りを止めるのみである



天壇圜丘にて

北京



萬壽山の長廊にて

Peking Beauties

釣



北京中南海公園にて

The Rod and Line at Work at the Chu-Nan-Hai Park, Peking



漢法醫

Chinese Doctors of the Ancient School

昔日本に醫學を教へた支那は清朝以後次第に主客顚倒して、日本、西洋の醫學に學んでゐる。例の文豪魯迅が最初醫學生として日本に留學したことは人の知るところだ。しかし支那に發達した漢法醫學は現在尙ほ反省期整理期にあるので、古い歴史に築かれた經驗醫學の强みを無視することは出來ない。たとへば支那古代に早くも行はれたお灸を現在二十世紀の覇者科學獨逸が盛んに使ひ出したではないか？

支那の醫學と云つても文化の一翼だから、時代の環境背景と道伴れに變遷發達したことは云ふまでもない。周代に陰陽の說あり、漢代に陰陽五行の說あり、晋代には道教の說、唐代には佛教が大きな影響を及ぼした。元・明には西歐との交通漸く繁く、清代に至つて考證の學興り科學的醫學は滔々として流込んだのである

然らば現在北京の中國側の醫者はどうかと云ふと所謂國醫即ち漢法醫と新式



診察



待合室



醫者の家

の科學醫に大別され、その間街頭に移動するいかがはしい治療者、術者がゐる。藥店にも堂々と店舗を構へた漢と洋の別があり、街頭のインチキも亦なかなか多い。利用する患者の率は次第に科學醫洋藥舖が繁昌する勢にあるのは當然であるが大衆が存する限り又漢藥の効能が變らぬ限り漢法醫も牢乎として滅びぬ筈だ。否將來の名醫は東西打つて一丸とするところに出るだらう


宋小姐
國醫張文修診箋
九月二日

處方箋――譯すると右のやうになる

宋孃

咳が數日續く、最初は輕いものであつたが、近日は益々ひどく劇しい時は頭部や胸が痛み夜が最も甚しい、脈搏も多い、これは外の風が肺を冷すからで寧咳湯を適當に用ふべきである

桔梗 四錢　法半夏（からすのしやく）三錢　只殼（からたち）三錢　前胡（みつぐさ）三錢
葛根 三錢　桑皮 三錢　杏仁泥（杏の實）三錢　茯苓（ふくりやう）三錢　蘇葉（紫蘇葉）
三錢　陳皮（乾した橙皮）三錢　黃芩（わうごん）三錢　爪蔞霜（てんかふん）三錢　甘草
三錢　蔓荊子（いばら）三錢　荊芥（けいがい）三錢　防風（はますか）三錢

（一錢は日本の一・四五匁に當る）


漢法藥店・定縣


漢法藥店の内部



佛傳浮彫——宮中觀樂

大同石佛——第六洞東壁

Stone Buddhas in the Sixth Cave at Tatung



佛傳浮彫——出身見病者

釋迦は中印度のマガダ國の太子として生れたのだから、何不自由なく育つたものと思ふ。それになぜ厭世の志をおこしたか。これは永久の謎である。けれども、佛傳家はこれに對して一定の解釋を下してゐる。つまり、前世の因緣である。前世の修德によつて、太子といふ尊い身分に生れ、さらに煩惱を離脫して佛となる因緣を藏してゐたのである。その因緣によつてか、太子は宮中における宴飮、抱擁、その歡樂の極點において、常にその空虛を痛感し煩悶に煩悶をかさねたのである。右圖はその宮中における歡樂の場面、抱擁してゐる一人、酒を飮んでゐる一人、屋中にゐる一人はみな太子をあらはしてゐるのであらう

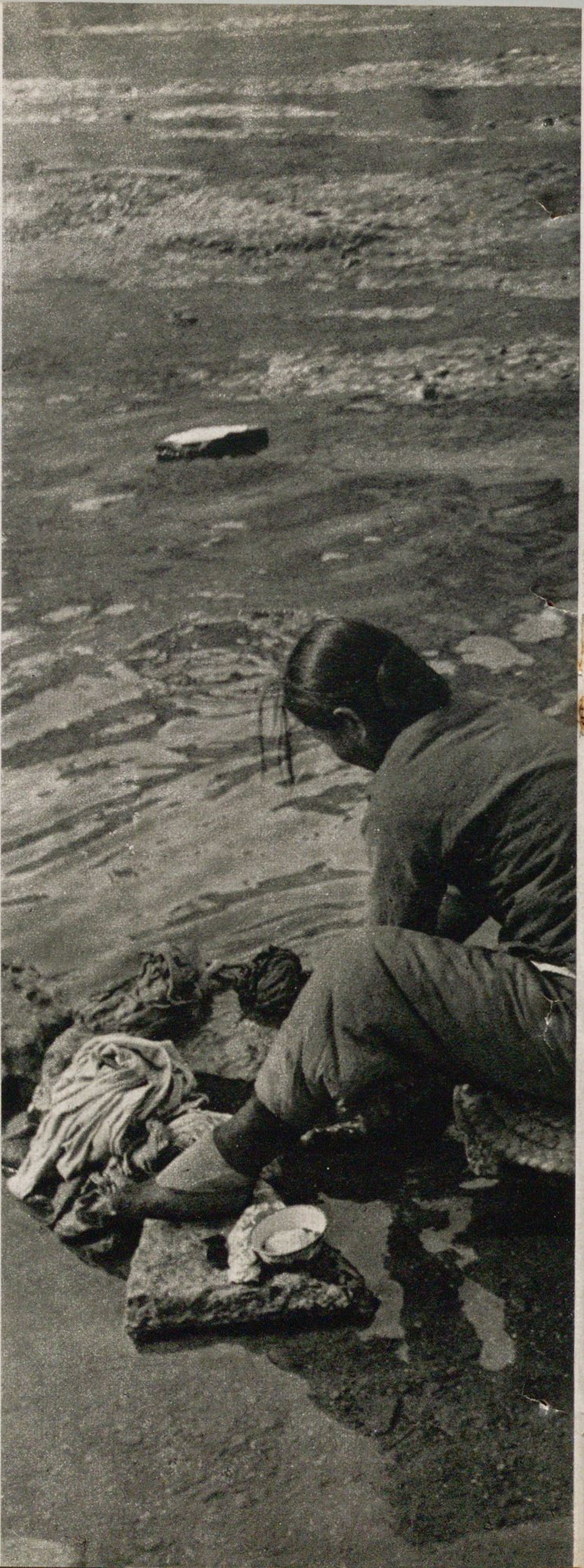
かうした苦悶の太子が、さらに人生の無常を痛感すべき機緣がつぎに到來する。すなはち、左圖は父王淨飯王の嚴重なる警戒にもかかはらず、太子は宮城の各門を出るたびに、老人にあひ、病人にあひ、死人にあひ、前後に比丘にあふ、かうして人生最大の死の問題に直面したとき、つひにその歷史的出家が決行されたのである。

（寫眞は東方文化研究所撮影）



洗濯——濟南にて・此處で太公望が釣をしたといふ

水ぬるむ



Spring Scenes, Tsinan

農村の子供

Children of a Chinese Farm-Village



京包沿線にて

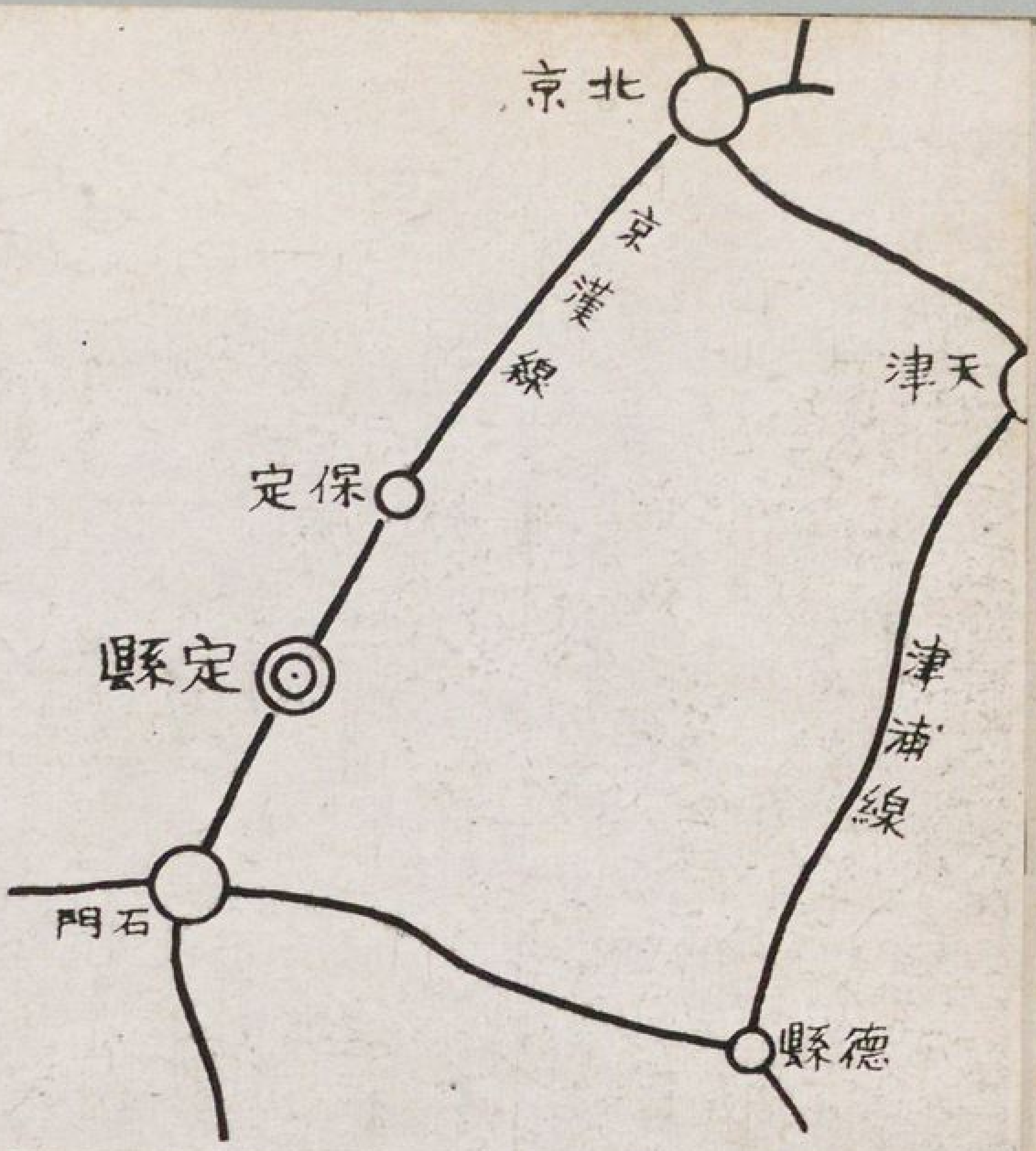


通州にて

定縣

——京漢線

Glimpses of Ting-Hsien,
Peking-Hankow Line



定縣は定といふ同名縣の縣城で、年老いた中國人の間では、定州の方が通りがよい。京漢線（北京—漢口間）の北京、石門間では保定、正定等につぐ要驛で、又、河北省内でも第一級の名縣であり、經濟上の模範縣である取引されるのは棉花、落花生、胡麻、



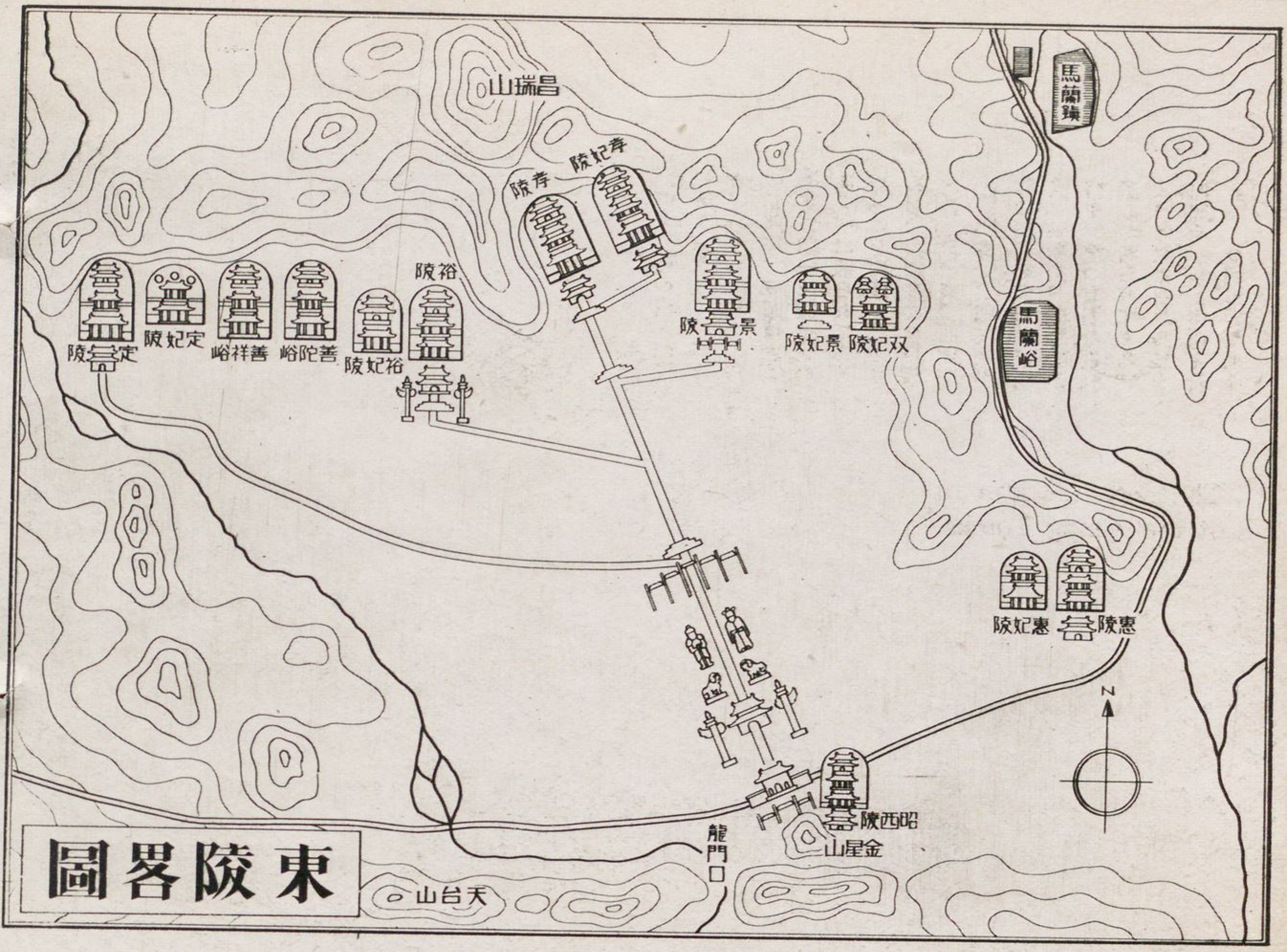
古塔・北宋・眞宗咸平四年（西暦一〇〇一年）から五十四年間かゝつて建立されたもの・高さ一三四米

それに各種の漢藥材であるが、この藥材の取引場としては、定縣の東方三十五キロの安國が有名である。また所謂名所にも定縣は惠まれ、なかでも、驛の東南約五キロの白塔は有名である。人口約八萬



城壁の一部（城壁の周圍七哩）




東陵畧圖
昌瑞山
孝陵
孝妃陵
裕陵
定陵
定妃陵
善祥峪
善陀峪
裕妃陵
景陵
景妃陵
双妃陵
馬蘭鎮
馬蘭峪
惠陵
惠妃陵
昭西陵
金星山
天台山
龍門口
N



五孔橋と石象

東陵

清朝十二帝の内、二帝は奉天（東陵、北陵）に、四帝は北京の南方の易縣に、五帝は北京の東方約一三〇キロの興隆縣に葬られてある易縣のを西陵と謂ふに對し、興隆縣のを東陵と謂ふが、東、西兩陵は陵墓群で、即ち東陵には清朝の黄金時代を成した康熙、乾隆の二帝や、彼の有名な西太后らが葬られてある。陵域は北に萬里長城を彌亘せしめた山脈を背負ひ、景觀雄大である

The East Mausoleum
of the Ching Tombs

景陵



桐材

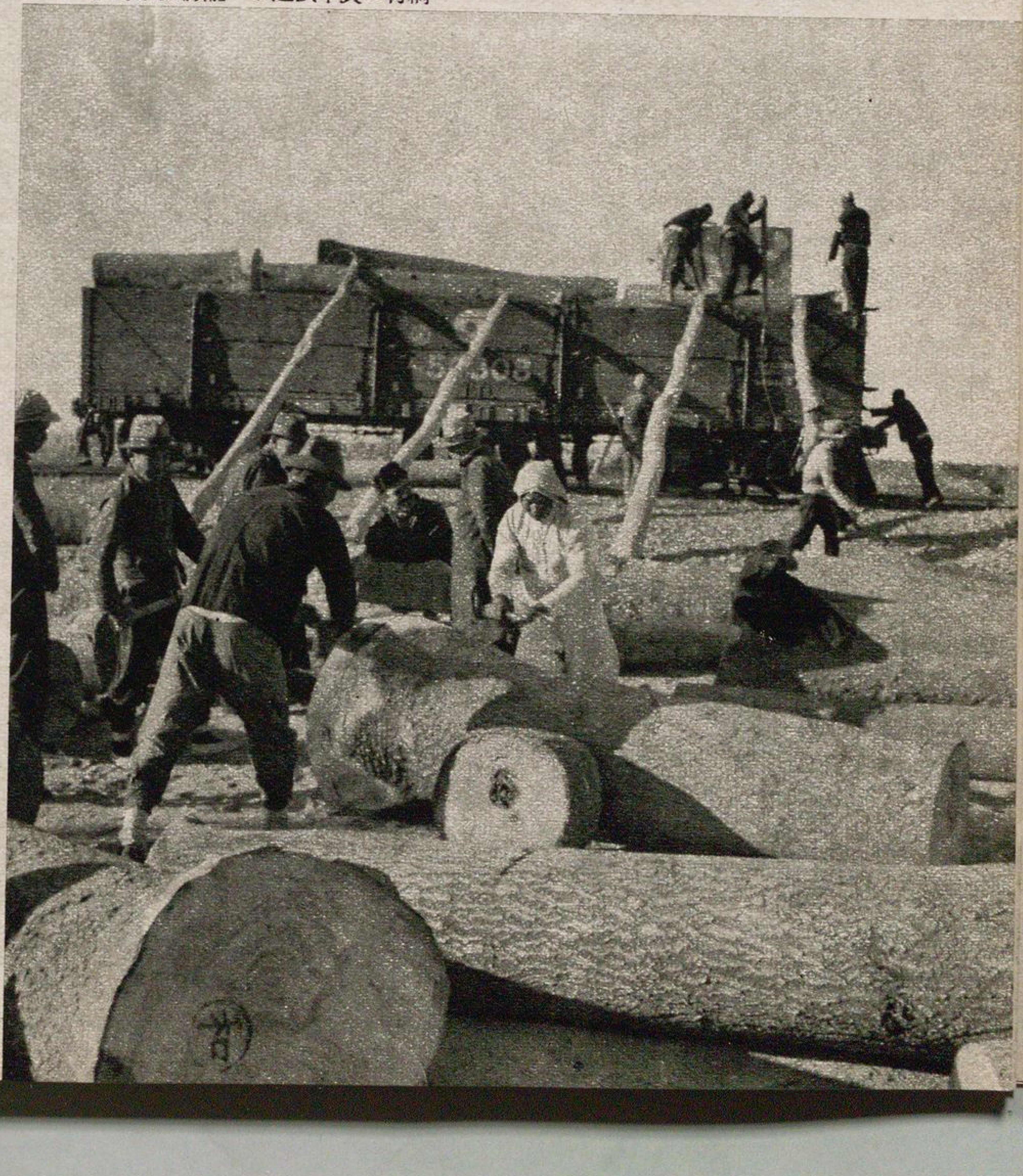
Paulownia Trees, Dead and Alive

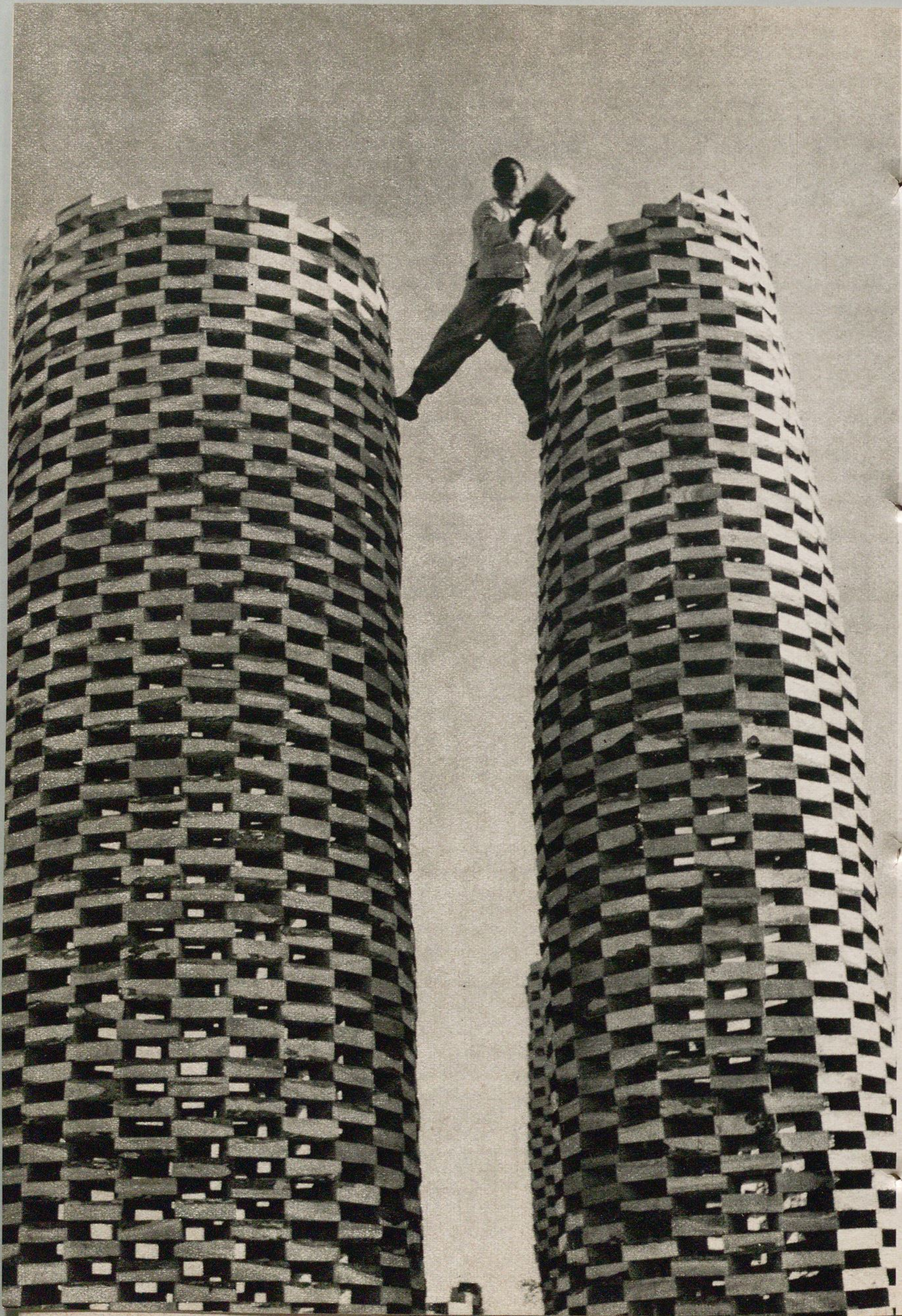
支那に於ける桐類は主として中南支に廣く分布して居るが、日本でいふ所謂支那桐は、山東省や河南省北部に産するもので、とりわけ開封、蘭封附近を中心とする隴海線沿線地帶がその特産地として有名である。この地方では部落の附近や畦畔などに植栽され、到るところに亭々たる桐の大樹を見受ける隴海線では、驛の構内にも支那桐を植ゑた所があり、その大樹の並木がいたく旅人の興味を惹く。北支のやうな用材に乏しいところでは、桐材を建築や家具材などにをしげもなく用ひられてゐる。北支の桐材は大正の始頃から日本へ輸出され、支那桐の下駄として故國日本の人達にも廣く知られてゐる。尙桐油を採る桐は、往々この桐と混同されてゐるが、それはこの支那桐とは全く別の種類である



碭山驛の桐・東隴海線

桐材の貨車積込み・隴海線蘭封驛にて





桐下駄材の風入れ・蘭封



豚

Pigs

豚は支那四億の民の中、回教徒を除いて一般に食用とされるので家畜頭數の首位を占め、北支では約八百萬頭と云はれてゐる

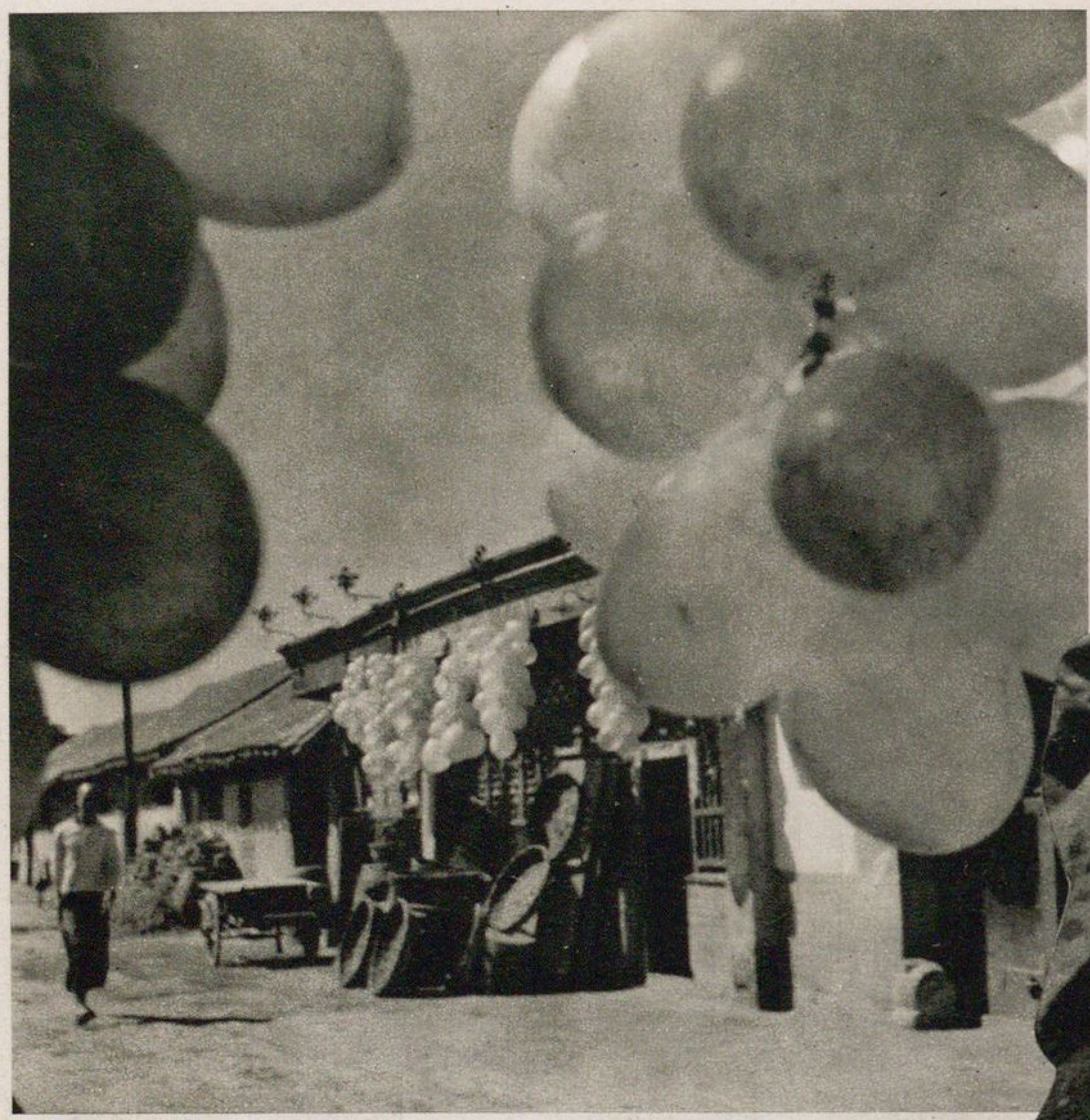
豚毛は近來刷子原料としてシベリア産の露毛にとつて代り世界産額の七五%を供給してゐる。特に北支、滿洲の寒地産は品質優秀で市場に好評を博してゐる。第一次大戰まではロシア毛は白毛中最優品とされてゐたのであるが革命後半數以上の豚が食用として屠殺され、更に肉質の改良を目指して米國種を交配した結果毛質の荒廢を來し、現在辛うじて國内需要を充し得るに過ぎない有様となつた

支那豚毛の輸出先は米國の四十%に次いで英・日・獨の順位で總額は約千五六百萬元に上つてゐる

豚の内臟の中、腸はソーセージの外衣として獨・佛・米及び和蘭に輸出され少數の羊、牛の腸と併せて年額七八百萬元に達すると云はれてゐる



豚市・北京東四牌樓

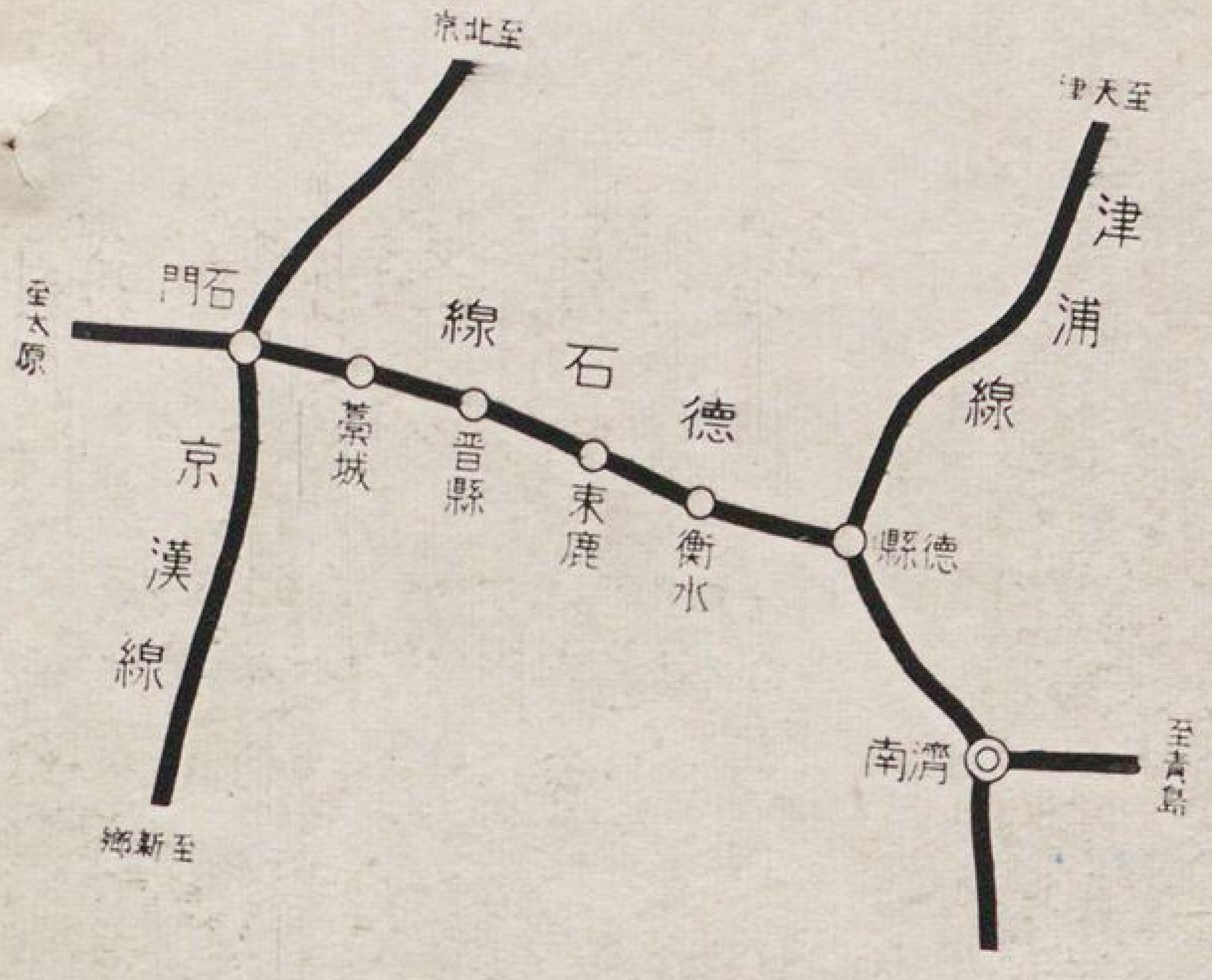


豚の膀胱を賣る店





豚の足と尾の料理





處女列車

開通式々場



徳石線開通

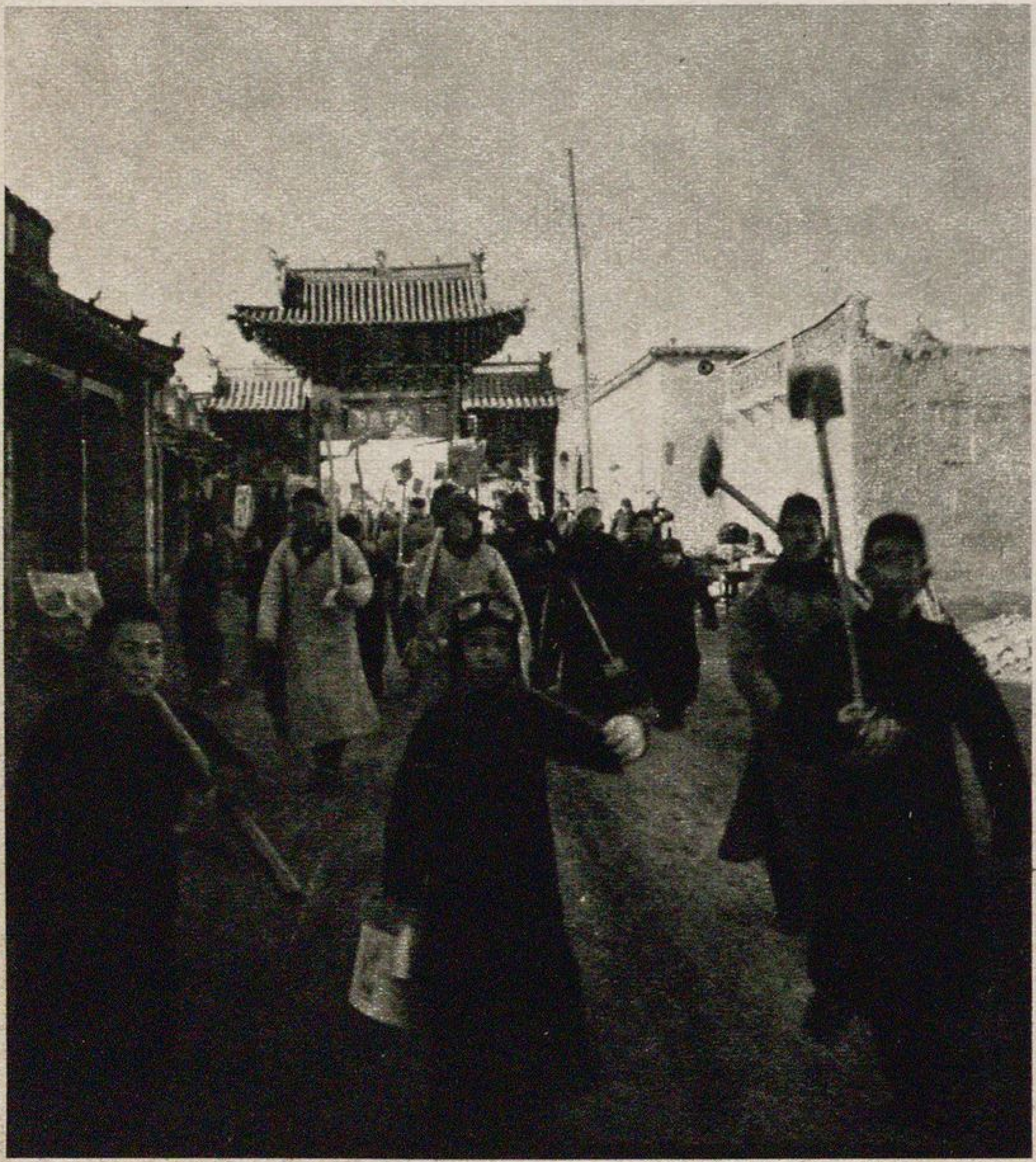
On the Newly Opened Teh-Hsien-Shihmen Line

建設の槌音高い北支の地圖に、その中央を東西に横斷する二百キロの新鐵道が出現した。華北平野を南北に縱走する京漢、津浦の兩鐵道を、その中央部で連絡せしめようとする計畫は孫文在世中からの長い懸案であつた。夫れが新たな興亞の脚光を浴びて日支軍民の協力の下に實現せられたのである。工事著手以來僅か五ケ月、兵匪の妨害と資材の不足に抗して敢行されたものであつて皇軍將兵にも多くの犧牲者を出してゐる

この鐵道は、山西省を橫斷する石太線の終點たる京漢線の石門（石家莊）に發し、冀中平野を貫いて津浦線の徳縣に至り、更に濟南より膠濟線を經て海港青島に至る。寶庫山西はこれによつて海港にその門戶を開いたわけであり無盡藏と稱せられる石炭をはじめ各種の重要資源は今後旺盛に搬出せられ、日本の戰時產業に活用せらるるであらう。また、この線の通過地帶は有名な農產地であるが、現在は共產系匪の根據地でもある。だから經濟路線として有望視されてゐるのは勿論、治安肅淸上に占むる役割、防共線としての使命も重大である。砲煙彈雨の中にあつて斯くの如く著々建設作業が推進せられてゐることは洵に注目すべき新東亞建設の具體的事實である



工事中の徳石線



工事を應援する愛路村民


無敵！國産第一位
ムッソリーニペン
スラスラ書けて
錆びず値の廉い
國産逸品！
新生國策イリヂュウム
白金ペン付
クラウン万年筆
流線型
書きよく
體裁優美
構造堅牢
北京中南海公園
大阪 株式會社 澤井商店

河南の匪患と阿片

石塚鶴鳴

支那には江に得て河に失ふと云ふ言葉がある。揚子江で得た利益を黄河の水害の爲に消費されるといふ意味である。黄河に密接な關係を持つ河南省民は如何に此の河に惱まされて來たか、住民の十か九は農民であり、しかも進取的でない彼等は此の黄河の怒りに觸れぬやう畏敬し、太陽に對しても只管風雨の順調を祈るのみで人工的施設などは、大禹の再來でも無き限り望んでも得られぬことと斷念して居るのである。然し識者の中には治水の意見を持ち合はして居る者も絶無ではないが、官不修衙（官吏は役所の修繕をせぬ）で、例へ公益事業でも私腹を肥し得ぬ。しかも黄河改修の如き巨費を要する大事業は望んでも實現し得られぬ事と諦めて、働きかける義人も出ず、太古のまゝの姿で生活を續けて來た。

元來河南民にも相當の貯蓄心は有るのであるが、積年に亙る土匪や軍閥の誅求が甚しいので、有產者も殆んど無くなるまで搾り取られ、折角貯めても歸するところ無產者と異なる點が無いので、些か捨鉢的な風にも見えるが、此の捨鉢といふことは頗る不味い結果を將來するのである。

前述の如く、住民の九割は農民である。如何なる國でも一番に平和な生活を續け得るのは農民である。然るに河南農民の實際は之に反し、民國元年以來平和な歳月を送り迎へることは出來なかつたのである。その一例を擧げて見れば、嵩縣は洛陽の西百六十支里にある。其處から同縣の黒峪鎭までは百四十支里で、計三百支里の間に點在する部落で、燒かれて居らぬものが幾つあるか、そしてそれは何故誰に燒かれたのであるか、之は言ふまでも無く全て土匪の仕業である。然らば土匪は何故に放火するのであらうか。

土匪は決して天下を取るべく行動してゐるのではない、彼等の中には無頼漢も有るが、荒年水災等により食ふに糧なき普通の貧農が大多數である。彼等は先づ餘り遠からぬ處で追剝ぎを働く。類は友を呼んで小團體が形成され雪達磨をころばすやうに段々と太り終には縣の警備力では一寸片づけられなくなる。斯うなると縣城以外の大小部落は彼等の跳梁に最適の天地に變る。如何なる土匪群でも最初から唐突に掠奪するものではない。先づその部落を保護することを名目として糧食の給與方を要求する。その部落民は前以て該匪團の性能を熟知して居るから要求を拒絶せずに要求の額を割引かせて之に應ずるので一時的平和が維持されるが要求は一度が二度となり地藏の笑顔も度重なれば澁面を見せ、彼等の感情にも間隙が生じ、忽にして圓滿が破壞されて掠奪暴行放火といふ地獄の繪卷物が展開されるのである。之は普通農民の匪化であるが、反對の立場に在つて土匪討伐に從事した正規軍が、小銃、拳銃は素より機關銃まで携行のまゝ中隊或は大隊位の軍隊が匪化する場合もあり、その生きた實例を記して見る。

目次

今は昔、河南の督軍に趙倜といふ將軍があつた。河南省汝南縣の出身で字を周人と呼んだ。前清毅軍の書記を振り出しに、軍界に身を投じた人物である。民國初年、河南で著名な匪首白狼張黑子、王天縱等が部下匪群を率ゐて河南、湖北、安徽の邊境に蟠踞攪亂を企て、頗る猖獗を極め數省に蔓延した。此時趙倜は毅軍に在つて十箇營を管領する統領の職に在つたが命を奉じて河南に來り部下を督して剿討した。その功に因つて河南省の督軍となり爾後十箇年この要職にあつた。その間袁世凱の帝政運動にも贊成し張勳の復辟運動にも參加し、段祺瑞の護法軍にも共鳴した程の利巧者であつた故に河南人は今に至るも頭腦靈敏圓滿なる政治的手腕の所有者であつたと稱してゐる。

民國十一年に直隷軍の曹錕と奉天軍の張作霖とが爭霸戰を惹起した。この時趙倜は靈敏なる頭腦の判斷を誤り奉軍と聯繫した。その祕密が呉佩孚に洩れたので呉佩孚は督軍を賞に懸けその討伐を馮玉祥に命じた。馮は第十一師を鄭洛の間に集結せしめ疾風迅雷的に開封を攻略し、終に趙の蟄居となつてけりがついた事件がある。この終幕の時であつた兄の趙倜は叙上の如く河南の督軍で弟の趙傑は河南軍の第一師長であつた。地方の治安は素より督軍の責任である。この時盧化縣嵩縣方面の治安の任に當つて居たのは第一師の約二箇大隊の兵力であつた。山でこの大事件を聞知つた彼等は洛陽の西方三十五支里、山西の佛跡雲崗と併稱される龍門の佛跡を經て洛陽に出て、汽車で開封に歸還せんとした。この消息を知つた呉佩孚は當時無敵と稱された第三師の一部を割いて龍門の警備に當らしめ、山より降つて來る討伐隊の武裝を解除せんとしたが、彼等は之に應ぜず元の討伐地區に戻り終に匪化して仕舞つた。眞に官軍と匪團との差は僅かに紙一枚である。例はその一に過ぎないが河南省奧地住民の兵匪觀は吾人等の想像とは頗る逕庭があつて、治者は兵でも匪でも何でも好い、要は苛斂誅求をせぬ仁者なら誰でも歡迎されることは金・元・清の歴史に見ても太鼓判が押されてゐる。兎に角河南省の農民は凶歳と兵匪禍には非常に苦しめられ惱まされて來たことは上記の一端を見ても知ることが出來る。さりながら鄕里を去つて他に移住する者は實に少い。出稼ぎの旺盛な山東省に較ぶればまだ餘地が有る樣にも考へさせられる。



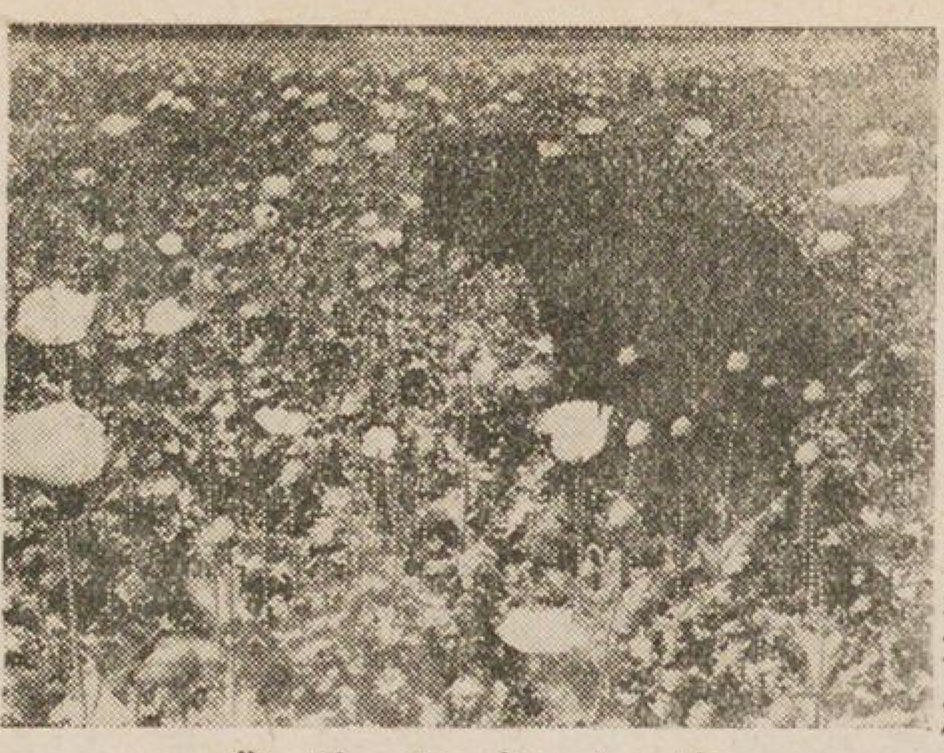
けし畑

河南省もそれによつて衣食住習慣等が一樣でない。概括して云へば南部は勤勞で北部は儉約であり、支那全土から見れば其の資質は不良の方ではない

次に河南省の阿片に就て記して見る「布團着て寢たる姿や東山」ならその名からして眼に可憐な山を想はしむるが、その名と似通うた支那の伏牛山は實に河南省の二大惱みを包藏する怖ろしい山である。而してその惱みの一は匪賊で、一は卽ち阿片である。

抑も河南省の阿片栽培は前清末期に始まる。初めその產量に於ては到底山西、陝西兩省に及ばなかつたが相當量の產出を見た。次で民國となるや阿片の栽培とその喫飲とは禁止せられ、森嚴なる法律となつて發令されたので、平原地帶は素より大行山脈・大別山脈の奧地までも全く根絶されたが、獨り伏牛山脈のみは奧地深くして調査不可能で踏査することが出來ず自然法外の天地に放置された。然し既に法律を以て禁止されたので栽培地域の減少したことは事實であるが、需給の關係は如何なる山奧でも無影響ではない。從前

十匁二圓内外を上下した阿片は一躍十數圓に昂騰し、更に二十圓、三十圓と飛躍して黄河の北岸地帯では四、五十圓に暴騰したので餘程の裕福者か金持の老褰者以外の者は自然と禁煙を餘儀なくせしめられてゐたが、民國二年第二次の革命となるや凡庸なる當路者によつて新政は弛廢し、白丸・金丹（何れもモルヒネを主劑とす）等が天津から漸次黄河北岸地帯に躍進を開始した。この藥品の猛毒さは迚も阿片の比ではないが唯携帯に便なると、煎じて煮詰むる手數とが省けるので瞬時にして彰德、鄭州等に白丸・金丹の製造所が現はれ、夫れに軍隊が荷擔して販路が擴張され、數年の後には黄河の南北廣汎な地域に浸潤した。



けしの畑の除草

民國五、六年頃河南省政府當局は阿片モルヒネの使用の嚴禁重罰を示達するなど、官吏には多少良心の閃きがあつたが、如何せん伏牛山中には匪賊猖獗し深山の叢藪の中には罌粟が栽培され從前よりも更に多量の阿片を産出し又白丸と金丹とは廉價の點から一般の嗜好に適し密造私賣され、その流毒は寒村僻地にまで瀰漫するに至つた。

民國七、八年となつては、禁煙令も愈〻弛廢して豫東の平野にも罌粟が栽培され、南陽以西の内鄕、淅川、南召等の諸縣は公然徵税して罌粟を栽培せしむるに至つた。況や伏牛山の如きは邊地全くこれ罌粟といふ狀況を呈し剩へ陝西省産の阿片も加はり、驚くべき多量の阿片はすべて地方軍閥の手によつて東方へ運ばれ、又白丸・金丹等も軍隊の庇護を得て運搬販賣された。故に支那軍隊の駐屯地は阿片とモルヒネの集散地となり、行政官廳は之とは反對に、その取締りを嚴重にするといふ奇現象を呈したが實際に於ては阿片・モルヒネ等の傳播は愈〻廣汎に濃厚の度を增し、行政官廳は禁煙課罰によつて利益を占め軍隊はこの毒品を保護運搬することによつて利得する等、何れにしても貪官汚吏、奸商、軍閥等の私腹を肥やす好餌に供され助らぬのは民衆で、彼等にして身を毀し家畜を失つた數は全く枚擧に遑なしといふ實狀で阿片・モルヒネの爲に社會民衆の被つた損害は、實に莫大なものであつた。

更に民國十一年には名を禁煙にかり竟に公然徵税して阿片の種子を給して其苗を植ゑしめ、又一面白丸・金丹の製造に拍車をかけたが、その内情を知つた吳佩孚は毒品委員を懲戒處分し、續いて焦作、汲縣、彰德等の白丸、金丹の製造者を檢擧處罰するなど禁煙の前途に一縷の光明を投げたが、それも東の間で雜軍の頭領と地方の不良富豪とが結託して表面禁止を裝ひ内面これが傳播を助長せしめた。

民國十四年には阿片禁止の假面も剝がれて、阿片は堂々たる政府の專賣となり、專賣局が設けられ阿片の栽培も自由となり、價格も低落して十匁僅に一圓内外となり、開封、鄭州、洛陽等は云ふに及ばず到處の城鎭の旅館に於ても自由に喫煙し得ることとなつた。

あゝ清朝は阿片のために香港を英國に奪はれ、民衆は產を破り身を損ふことを知りつゝ今尙戀々として禁絶することの出來ないのは抑も何のためであらうか。（筆者は河南省陸軍特務機關囑託）

農村と市

みづの・かほる

北支では、都市縣城から離れて農村に這入ると、物の賣買は市で行はれる。前にも一度述べたやうに、北支の農家は殆んど例外なしに集團して部落をつくつて居り、その一單位が小さいのは二、三十戶から、大きいのになると數百戶にも及ぶものもあるが、先づ百戶あまりのものが一番多い。その農家の集團卽ち部落には、特殊なものを除いては、部落內には店鋪が無いのが一般である。この點日本內地の農村とは多分に趣きが違ふ。一個のマツチを買ふにも、一斤の砂糖を買ふにも、子供に一本の鉛筆を買つてやるにも、一切の買物は市に出かけて用を足すのである。

筆者はかつて事變前、北支の農村調査で奧地を步き廻つたをり、折角辿り着いた大きな部落に、一軒の店鋪も無くて、ほしい煙草が買へなくてがつかりしたり、日暮れて泊り着いた部落に米や小麥粉を賣る店さへ無くて、砂混りの粟粥をすすつたりした北支農村の不便な旅の思ひ出をもつてゐる。

さて市は、北支では集といふ。集は日本の市と全く同意義である。部落には集の立つ部落と、立たぬ部落とがあり、それは古い昔からの―それは部落の古老に聞いても判らない位の―慣習によつて定められてゐる。しかし集の立つ部落は、縣城への大道に沿つてゐるとか、舟運のある河川に沿つてゐるとか言つた比較的交通の地利を占めてゐるものが多い。又部落の集團も大きくて經濟的勢力も豐かなものが多く、部落の歴史に於ても古いものが多い。そしてその部落には、由緒ある廟をもつ場合が多いが、このことは集の起りが、廟詣りの人達の集りに始つてゐることを物語つてゐる。

次に集の立つ部落が、全部落數のどの位な割合にあるかといふと、これは地方の自然的、或は社會的條件等から來る部落の密度によつて一概に言へないが、凡そ十部落內外から十數部落に對して一部落の割合である。これを距離から云ふと、たとへどの部落に住んでゐても、集の立つ部落へは半日がかり位で往復が出來る程度で、遠くても日本の二里を出てないのが普通である。

集は每日立つのではない。一旬の內の二日、卽ち、一と六か、二と七か、三と八か、四と九か、五と十かのつく日、時には三、六、九の集といつて、一旬三日のものもある。又縣城とか特に大きな鎭には、一旬四日のものもある。この一旬に四日の場合は、大抵半分の二日は大集で、あとの半分の二日は小集である場合が多い―例へば、一三、五、八なら、一と五の日が大集で三と八の日が小集の如きである。

そこで北支の農村では、集といへば五日、五日といへば集といふのが常識で、恰も日本の月給取りが、一週間の七日が彼等の生活をくぎるやうに、北支の農民の生活には、五日のくぎりが大きな意味をもつ。物の賣買には、五日を單位として豫定が立てられるのはもとより、部落外との連絡交涉ごとにも、この五日の集が都合よく利用されてゐる。

集の立つのは、定められた集日の一日中ではあるが、おほかたは午前中位で片付いて了ふ。集日の朝は、近所となりのものが誘ひ合して三々五々出かける。穀物をつけた驢馬を追ふもの、天秤棒で實棉をかつぐもの、落花生を積んだ孤輪車を押すもの、十個あまりの鷄卵を入れた籠を小脇に抱へたもの等々、老いも若きも足どり輕く急ぐ。かうして朝まだき、遠ち近ちの部落から何百といふ農民がどつと潮のやうにおし寄せて、又潮のやうに退き去る。

山東のある地方へ行くと、夜集といつて、夜明けのまだ薄暗い內に集が立つて、天明に到るともう人が散るといふあはただしいのもある。かうした慣習は、集への往復に、その日の仕事に差支へさすまいといふことから起つたことである。

集の立つ部落には、定住の商人と移動の商人との二種類がある。その部落を圍繞する背後地圏の豐かなほど物資の流動が盛んで、從つてそこには大きな集が立つわけである。そんな部落には、定住の商人が多く規模の大きな店鋪が建ち並んでゐる。これらの定住の商人は、主として農家の生產した穀物や棉花などを取引するもので、多くは土地の富農達の資本で經營されてをり、中には農家へ金融をやつてゐるものもある。

移動の商人は、所謂屋臺店を出す小間物雜貨商の類で、これらの商人たちは、いくつかの集を巡り廻つて商賣をするものである。

それから又棉花や落花生や葉煙草などの特產の出る地方になると、その時

節には都市から商人が集をめがけて買付けに出張つて來る。この節の集は、田舍ながらも雜閙を極め景氣づいて來る。以上述べたやうに、集の役目はもともと物の賣買交易にあるのであるが、この集が又農村社會へいろいろな役割を演じてくれる。

集は特定の部落に、そして定められた日にしか立たない。しかも農民が生産物や家畜を手離すには、必ずこの集で行ふことになつてゐる。集の當日には、請負の税金取りが頑張つてゐて、取引する農民の生産物や家畜に漏れなく税をかける。かやうに集は政府の徵税を便利にするために役立つて居り、これを又農民側から云ふと、集は農民の搾取される場所でもある。

集は又他部落との連絡の役目を果してくれる。前にも一度述べたやうに、農民の世界は部落であり、農民の生活は殆んど部落を出てないと言つても過言ではない。彼等農民は物の賣買を除いては、行政的にも經濟的にも社會的にも、他部落との交渉は極めて少い。農民は部落の殼の中に閉ぢこもつて、日を消し一生を送つて行くのである。だが幸ひに五日に一度のこの集が、僅かに部落相互の孤立を救ひ、部落相互の繫ぎとなつてくれる。

又集の立つ部落には、大抵徵税、保安、郵政と言つたやうな機關が、ささやかながらも出先をそこに置いてゐる。集に出て來た農民が、そこで役所からの達示を知り、或は郵便代辦所の窓口に掲示された自分宛の信書を受けとつたり、又發信したりする。

又隣部落の匪襲事件を聞いたり、小麥粉の値上りを知つたり、或は耳ざとい商人から、遠い都からの時事ニユースを聞いたりして、それを自分の部落へもつて歸つて得意になつてばらまくのである。殆んど新聞を購讀してゐない北支の農民たちには、この集が唯一の報道機關でもある。

又集は農民にとつては農村に於ける最大の慰安場所でもある。集に行くことを支那語で趕集といふが、この趕集といふ語は、農村に於ける最も耳ざはりのいい言葉であるらしい。五日に一度半日を費して、一袋の穀物を集で金に換へ、歸りには娘の鞋下を、或は老母への土産に菓子を買つたり、或は十錢あまりの金を出して豚饅頭を食べて悦に入つたり、或は高粱酒の一杯にほろ醉つたりする農民の姿は、まことに眺めるだに平和な情景であり又可憐でもある。又大きな集になると、講釋師がゐたり手品やのぞきなどがあつて、彼等は一と時をこれに興じ入つたりする。この集こそは、まさに農民の命の洗濯場であり極樂である。

だが、この趕集は殆んど男の領分であるといふことは、何んだか農村の女に對して氣の毒みたいである。どこの集の人出を見ても、女は僅かに二、三％か四、五％にしか過ぎない。不幸にも北支農村の女には、ささやかな趕集の樂しみさへも味ふことが出來ないのである。これも一つには纏足の足が、外出に困難であるといふことに因るものであらうが、さりとてどこまでも惠まれない女たちではある。

さて、北支の農村の集は、いろいろな意味に於て部落民の生活と關聯があり、部落のあらゆる思想も、文化も、經濟も、風俗も、この集を通して浸潤して來るのである。又部落相互の連絡も、そして行政機關との交渉さへもこの集の機會を通してなされるものが多いのである。

かく北支農村の集を觀じ來たる時、北支農村の建設上、農民の組織化、精神作興運動、或は又更に合作社の普及の如きは、先づこの集の實態を究明し、この集の機構を活用することが最も近道である――と筆者は思ふのである。

（筆者は華北交通資業局參與）

血料理

黄子明

鳥屋に往つて、シヤモ鍋をとるにしても、あひ鴨を喰ふにしても、肉よりはモツの方を珍重して、おつな鳥料理と日本ではされてゐる。

北京の全聚德に鴨子を喰べに行く。通稱烤鴨子の肉や肝はむろんのこと、鴨掌といはれてゐる家鴨の掌の皮や水かきの料理も、日本人の誰もが珍味と激賞して舌鼓をうつ。

それだのに、何故日本には鷄の血や家鴨の血のお料理といふものがないのであらうか、ひよツとすると有るのかも知れない、が、寡聞、私はまだ聞いたことがない。

既に鷄や家鴨の血のお料理すらないとすれば、牛豚羊の血のお料理に至つては、恐らく日本には絶無であらう。

臟物料理が珍重されてゐながら、血のお料理がないといふことは、少しおかしなことだと思ふ。

——◇——

支那料理に日本の友を誘つて、今日は血の料理でも喰はうぢやないかといふと、餘程のイカモノ惡食家でもない限り、たいてい眉間に小皺を寄せて、景氣のいゝ返辭を即座にしない。

肝といふと、氣味惡い感覺どころか却つて食慾感が勃然と活躍するらしいが、さて血となると、いかにも氣味惡く感じて食慾神經が遽かに戰慄してしまふらしい。

なにも私は玆でへ理窟をこねるわけではないけれども、萬物の靈長を自分勝手に誇稱する人間が、情け容赦もなく禽獸をぶち殺して、血のしたゝる其肉を舌なめずりして悦び、見ただけでも穢らしくいやらしい臟物を賞味して居りながら、なにも血だけをそれほど氣味惡く嫌やがらなくつてもよささうに思ふ。

——◇——

肉には蛋白質脂肪……臟物には近來むやみに流行るＶＡＢＣ……が多量に含まれ、單に旨いといふ味覺ばかりでなく營養の上にかく／＼の要分があるといふだらうが、血にはさういつた營養が有るのか無いのか、血に含まれてゐる營養成分に就いては、私の非科學的な書棚には、さういふことを調べ出す適當な參考書が一册もないので、古いものだが漢法藥學の玉手箱の本草綱目から、禽獸の血の藥効を探し出してみると、

鷄血——解毒　骨痛み　神經痛　神經衰弱

鴨血——解毒　小兒白痢

牛血——解毒　利腸　血痢　血便

豚血——解毒　マラリヤ　中風　淋瀝　ヒステリー

羊血——婦人貧血　産後　中風

とある。何んと藥効ゆたかなものではないか。更に近代營養科學に據つてこれらを研究してみたら、ヴイタミンのＸとかＺとかゞ、あツといふ程うンと含有されてゐるのかも知れない。

——◇——

ピン／＼はねる活きた大鯉を高い處に吊し、一擊その頭蓋を割り、その血がたら／＼とつづいて一筋の紅い絹絲みたいに落ちるのを、その下の湯の沸ぎつた鍋で受けると、湯の中でそれが凝結して血の素麵が出來あがる。

その鯉の生血の血素麵を高貴求眞の美味として、宴賓の酒席に出した前清楊州鹽商の富豪どものべらぼうな贅澤さは特例として、一體に血の料理は、中國では下層階級に多く愛好され、喰べものに貴賤の別ありとせば、血のお料理は卑賤なものの部に屬する。

從つて、上中兩階級を相手とする支那料理屋では、先づ幾んど血を扱はない。大衆化した北京東安市場のうちの支那料理屋でも、自家扱ひの鷄鴨から出るだけの血で、鷄血酸辣湯や鷄血豆腐湯の一二種ぐらゐのお料理しか拵へない。

豚の肝の如きは、炒腰花などのお料理にどの支那料理屋でも盛んに使ふ。血となるとそのお料理を拵へない。安つぽい料理屋と見られるのを嫌ふ面子觀も手傳つてゐるのであらう。

——◇——

だが、四百有餘年の歷史にたてこもつて北京隨一の老舖といはれる西四牌樓の俗稱沙鍋居こと和順居は、流石に豚專門の料理屋だけあつて、豚の血の名物料理がある、紅血腸湯といふ。

豚の腸に血をつめたものを一旦煮て更にそれを程よく輪切りにし、豚のモツなどをあしらつたお汁で、名代ものだけあつて舌を驚かせるに足る。

また鷄の血料理では、前門外煤市街の致美樓のが名高く、賤しいどころか頗る以て豪勢なお料理を拵へる。烏玉鷄血湯と鮑魚鷄血湯とがそれで、これも食通垂涎の美味である。

東安市場や煤市街あたりよりぐつと下つて、勞働者階級の盛場として恐ろしく賑やかな天橋とか、城外のお百姓たちが多く往來する各城門内外附近の宿場料理屋では、お客がお客だけに血のお料理を相當多く扱ふ。

――◇――

血料理觀念が料理屋に於てさうあるが如く、一般家庭に於ても是れまた同樣で、裕福な暮しの家庭では、自宅で鷄や家鴨を屠した場合を除き、鷄鴨の血料理はめつたに拵へないが、貧しい人たちの家では、豚や羊の血料理は多く食膳に上る。安價といふことがその主因を成してゐることは無論だ。

富裕な人々の多く住んでゐる邸宅街には、めつたに賣りに來ないが、場末の貧乏街には、豚羊の血を容れた桶を擔いで「豚血羊血（ツーシエヤンシエ）　紅豆腐（ホンドウフ）」と呼賣りが毎日通る。血の凝まりぐあひがお豆腐に似て、その色に紅みがあるところから、紅豆腐と聽きいい名前にして呼ぶ。

買ひにゆくなら、何處のマーケツトでも賣つてゐる。

私の家でも、時折羊の血料理をつくる。凝まつた羊の血をお豆腐のやうに賽の目に切り、羊肉や酸白菜と一緒に胡麻油ていためてからたつぷり水をさし、その中に豆素麵をいれて煮る。ロの奢つた人が、たまさか田舍の泥鰌汁を賞てるやうに、棄てがたい味ひである。

――◇――

天橋に往つてみると、羊血湯を賣る屋臺店が軒ならびに竝んでゐる。

直徑六尺ぐらゐの古色蒼然たる大鍋のうちに、羊の腸に血豆腐をいつぱい詰めた羊雙雙を幾條もいれ、それを羊のモツと一緒に煮たもので、眼に映る感じはいさゝか汚ならしいが、かういふやつはさぞ旨からうと、味覺は覺えず唾をのむ。

鍋の側にお粗末な長テーブルが置かれ、熊サン、八ちやん、田吾作サンたちが幾人もバンコに腰かけてテーブルを圍んでゐる。

「掌櫃　一杯貰ふぜ」

といふと、お碗へその腸詰の血を幾切れか輪切りにして入れ、それに油ぎつた汁を盛つて出す。唐ガラシや葱韮を刻んだ藥味を散らし、これを啜り喰べてゐる愛すべき汗と泥の眞人たちの喉が、いかにもお美味しさうにそして滿足げに鳴る。

岩村成允翁の令息で今華北交通會社に勤めてゐる成正サンは、若い支那學の學徒で且つ眞摯な北京研究家であるが、時々天橋に出かけては彼等眞人たちに伍し、巧みな支那語で彼等と話を交はしながら、この羊血湯を喰べるのを樂しみにしてゐると聞く。

しかし致美樓の鷄血料理、沙鍋居の豚血料理は兎に角、天橋の羊血料理に至つては、勇氣凛然たる美味求眞の徒に非らずんば、その風味をたんのうすることは出來ない。

――◇――

血は食用として不潔なものか、ここに變妙な現象がある。それは、ヂンギスカン料理で日本人に馴染み深い東來順や西來順や一畝園や西銘軒などの羊を主とする回回敎徒の料理屋が羊肚といふ羊の糞袋料理（これは北京人士の殊に愛好する羊料理の一つ）までしながら、羊の血のみは絕對にお料理に使はないことである。血は汚穢ないものだからといふのがその理由だ、何うも肯けない。

糞袋を喰ひ肝腸の臟物をも喰ふ以上きれい汚いの問題はとつくに通り越してゐる。それよりは血に對する營養科學的研究だ。もし營養價値が豐富であるならば、血のお料理は日本でも考へていゝんではないか。

（筆者は北京在住中國人）

青州游記

吉岡義豐

膠濟線の益都站で下車すると、驛前には二十數臺の洋車が待機してゐる。驛から縣城までは五支里の道程だから嫌でも洋車を雇はざるを得ない。日本人が古くから居住してゐるのは驛前一帶であつて、煙草の賣買を主なる職業としてゐるらしい。この日本人街を通過して、縣城に向つてしばらく車を驅ると、道の兩側に小丘をなした土阜が蜿蜒と連つてゐるのを目撃する。之が古の東陽城址である。東陽城は南燕慕容超の太上六年、卽ち東晉安帝の義熙元年（西紀四〇五）に築かれたものである。この城に對して現在の青州城は南陽城とも呼ばれてゐた。東陽城と南陽城との間には、南陽河が介流して自然の界をなしてゐる。東陽城が嚴然たる間は、その南側を洗つて流れてゐる河を南陽と呼ぶことは、相應しくもあつたらうが、この城は早く失せて、南陽城卽ち現在の青州城のみ殘つた爲に今南陽河は青州城の北側を縫つて流れてゐるわけである。青州城の創築に關しては、北齊天保年間（西紀五五〇頃）と通說されてゐるが、已に魏書侯淵傳に、夜青州の南郭を襲ふ云々の記事がある所よりして、侯淵の叛した天平二年（西紀五三五）以前に、南郭が修築されてゐた事を知る。且つこの南郭は卽ち今の青州城の位置であるに相違ない。魏は東陽城に據つたのであるが、この地方の安定と相俟つて、城內の戶口日に增加し、南陽河の南にまで發展するに至つて、遂に南郭を築いてその保全を計つたのであらう。北齊に至り之が本格的城として修理を加へられ、以後、隋、唐、宋、元、明、清と歴朝覆土してこの城に據つた。城壁の高さ三丈五尺、周圍二里六町の現青州城は又膠濟沿線の一偉觀と云へる。

青州で吾々日本人として、殊に忘れる事の出來ぬのは、慈覺大師圓仁の足跡である。圓仁は云ふまでもなく、日本天台の大成者で、その入唐求法に關しては、世界的名著たる彼の入唐求法巡禮記に詳しい。

唐文宗の開成四年六月七日（西紀八三九）、山東文登縣淸寧鄕の赤山村に漂着した圓仁は、その翌年には山西五台山への巡禮行を發願して、二月十九日從僧三人を伴ひ、此地を發つて路を五台に取つたのである。青州に到着したのは三月二十一日であつたから、溫暖な山東のこのあたりは、正に春爛漫と云ふべきであつたらう。こゝの龍興寺に止宿して判官蕭氏より禪印を受け、四月三日再び出發するまで十數日間をその宿房に起居したわけである。

さてこの龍興寺は現在湮滅してその遺址を明かにする事は困難であるが、しばらくその歴史的變遷のあとを辿るに、寺はもと劉善明の宅であつたのを捨施造寺したのに、起原すると云はれる。南齊書卷二十八に、善明の傳がある。彼は宋に仕へ北海大守となつてゐる。元嘉二年頃には、時人がその宅を佛堂と呼んだと云ふが、南齊書の彼の傳には、奉佛の事を云つてはゐない。但し彼が慈善と潔白とを以て終始した事を考へる時、巷間その宅を佛堂と稱した事も故なしとはされない。北齊武平四年には、臨淮王婁定遠がその宅を重修し、壯麗な佛殿を營んで南陽と寺號し、三丈九尺の阿彌陀佛を本尊とし觀音、勢至の二菩薩を脇侍として安置した。寺を南陽と云つたのは、南陽河のほとりに位置する爲である。今北關外迤東の文昌宮には「北齊臨淮王像碑」が殘つてゐる。この碑陽は「司空公青州刺史臨淮王像碑」であり碑陰には「龍興之寺」の四字を大刻してある。碑高一丈、寬五尺、二龍蟠結の螭首や刻字の整嚴等、北齊碑の面目を傳へる貴重な史料である。碑陰の龍興之寺の四字は各文字の徑尺五寸あり筆勢頗る雄渾である。この臨淮王像碑文中に南陽寺の位置を說明して「南陽寺は乃ち正東の甲寺なり、既に左闤闠に通じ、亦右澗谷に憑る。前に崑磐を望み却て泚瀰に隣す」とあるが、之に依れば寺は左に市肆と續き右は南陽河に近く、前方に雲門、駝山の絕景を望み而も淘米澗に隣してゐたのである。

劉善明の故宅は、郭內にあつたと云ふが之は今の城西北隅にあつたらしく龍興寺も亦城西北隅修身坊にあつたとされてゐるから、善明宅を改裝した南陽寺も亦この地にあつた事は云ふまでもない。城西北隅に南面して建てられた寺を想像する時、北齊碑の文は恰も該當する。淘米澗は宋の元嘉年間青州の飢饉に際し善明が自分の倉を開いて民衆を救ひ、その米を洗つた水が流れて溜つたものであると云ふ。現城內城隍廟の北側にこの地名を存してゐる。

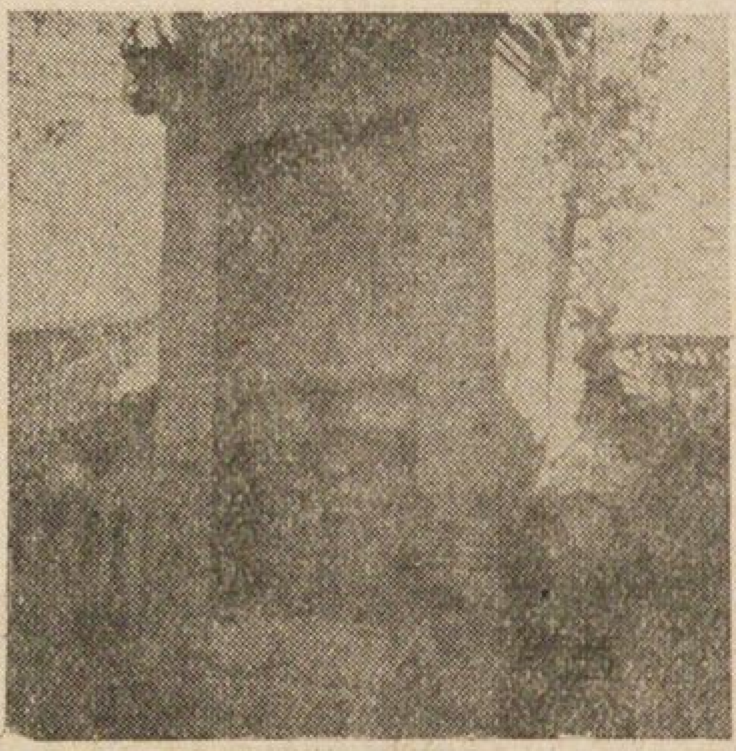
次に北齊碑陰に何故、龍興之寺と刻してあるかと云ふに、此の文字は唐の

李邕が北海大守となつて在任してゐた時に、寺額として書いたものである。一體龍興寺は北齊には南陽と呼び、隋開皇元年に改名して長樂と云ひ、又道藏と云ひ、唐則天武后の天授二年には大雲と名け、開元十八年始めて龍興と號したのである。李邕は開元年間に北海大守となつて、青州一帶を治めてゐたのであるから、寺額はその在任中に書したものと考へられる。

之を北齊碑陰に摹刻したのは、唐人であると傳へてゐるが、之は當らぬ。この事は同じ碑陰の左に、孫愨の題跋がある事に依つて明かである。即ち金の皇統丙寅年（西紀一一四六）に濟南の孫愨が青州を過ぎ、たま〳〵龍興寺を訪うた時に、李北海の寺額が已になくなつてゐたのを見て、僧人と謀り、自家所藏の拓本に依り、之を該碑陰に摹勒して、後世に傳へたものである。

北齊碑は南陽寺に建てられたのであるから、之はそのまゝ龍興寺にあつたわけであるが、それがどうして文昌宮に移つたかについては、同じく文昌宮内に現存する「重建北齊臨淮王像碑記」に明かである。この碑は清の嘉慶七年（西紀一八〇二）に建立したものであるが、中にかう云つてある。

「北齊臨淮王像碑は武平四年に立つ。篆額に云ふ、司空公青州刺史臨淮王と。書は婁定遠なり。碑はもと南陽寺にあり、唐の開元中名を龍興と更む。今の府城西門内澠米澗の西は蓋し其遺阯なり。碑陰に龍興之寺の四大字あるは、李北海の書する所の寺額に本づき金皇統六年此に摹刻す。左方に濟南孫愨の題跋あり、齊乘には以て唐人の續刻と爲すも、殆ど未だ孫跋を見ざるのみ。其後寺廢し、明の商河王は城北の彌陀寺に移置す。而して後已に斷裂し、鐵を以て之を屬す。日久しくして傾欹岌岌として墮ちんとす。たま〳〵益都故令周君嘉猷の子、ついで府城を修め、其徒を以て碑を徙し、文昌祠下に臥置す。因循して未だ立てず。其斷石零落せるものは別に段君松苓家に藏す。時に乾隆四十七年九月なり。上武平立碑の時を距たる事、一千二百有十年なり、云々」



北齊臨淮王像碑陰

之によつて碑の文昌宮に現存する由來を知り得る。

龍興寺は元末に兵燹し、明の洪武元年には、寺址に城隍廟が立てられ、同八年には廟を改めて齊藩宮となした爲に、城隍廟も亦西關外に移されたのである。こゝに於て龍興寺は完全に湮滅し、臨淮王像碑が僅かに北關外の彌陀寺に移置されたものである。

彌陀寺は舊志によると、定慧寺の西にあつて、俗に北大寺と云はれ、劉宋に創建、北齊に重修されてゐる。明衡藩商河王も亦この寺を重修してゐるから、王と寺との關係は深く、碑をこゝに移したのも偶然ではないと云へる。其後清朝に入り、乾隆初年には漸く寺門傾圮し、知縣李時乘が、其山門及び大雄殿を拆いて、東嶽廟を修するに至り、全く廢寺となつたのである。時に里人は、彌陀寺の佛像を定慧寺に移管し、又北齊碑は周嘉猷の徒に依つて、文昌宮に臥置されたものである。

定慧寺は元代の創建である。洪武十九年の重修碑があるが、文字磨滅して判讀出來ぬ。その大雄寶殿には、立派な木彫の彌陀三尊を放置してあつた。之が彌陀寺より搬入したものである。寺には現在全眞教所屬の道士が住してゐるが、漸く生活を支へてゐるにすぎぬ。一方文昌宮は清初の創立であらう。現に小學校に使用してゐる。定慧彌陀の兩寺は曾ては北關外に、東西相對せる大伽藍であつた。定慧寺と文昌宮とは約三丁程しか離れてゐない。何れも現城北關外になつてゐるが、古の東陽城を想定すれば、この三者はすべてその南關附近に位置してゐる事となる。

文昌宮に現在北齊碑がある爲に簡單にこゝを龍興寺址と稱してゐるが、その適否は上述の説明に已に明かである。

宋の范文正公は、龍興寺僧舍の西に一清泉を得て亭を建て、こゝに住すと云ふ。現に范公亭が、西關外少し南に城壁に接し、南陽河に面して存してゐる。院中に一井有り且つ千年を經た古木數株がある事よりしても、當にそのかみの苑公亭である事が知られる。この亭は龍興寺僧舍の西に營まれたと云ふのであるから、寺は亭の東方にあつた事を知る。以上の諸考察に依つて、龍興寺址の大體を推察するに、現在西關内に閻王廟があるが、この廟の稍〻東方より齊藩牆址に至る地帶であると考へて大過ないと思ふ。

今こゝに龍興寺の概略を傳へたのははるかに慈覺大師求法の跡を偲び、千餘年前、已に青州は吾々に取つて、有縁の地であつた事を想起したい爲である。

（筆者は眞言宗在支研究生）

汾酒物語

石敢當

紹興酒といふのは東京の支那料理などで云ふラオチウの王である。東京あたりに行くラオチウ（老酒）が果して本物の紹興酒であるかどうか、よく判らないが——とてもまづくて本物と思へないので——兎に角、支那酒を大別して黃酒（釀造酒）と白酒（蒸餾酒）とに分けるとすれば、紹興酒（浙江省の紹興縣で造られる故に、この名がある）は黃酒の代表である。老酒（ラオチウ）といふのはこの酒が古いほど好いと云ふところから起つた宣傳的(？)な稱呼であるが、今日では古くても新しくても、要するに黃酒でさへあれば老酒と呼ぶやうな弊風を馴致してしまつてゐる。この紹興酒に對して白酒の代表と目すべきものが汾酒である。汾酒は山西省の汾陽縣杏花村で造られるものであつて、北支滿洲一般に造られる燒酒（高粱酒、白干酒等の別名がある）と別に大して異りはないのであるが、こゝの產品が最も良質といふことになつてゐるわけである。

酒仙の元祖たる唐の李太白の詩に、「清明時節雨紛々、路上行人欲斷魂、借問酒家何處有、牧童遙指杏花村」とあるその杏花村は右の汾酒の產地の事であると山西人はお國自慢をする。現に筆者が大正九年太原で閻錫山督軍に會つた時にも、閻氏からそのお國自慢と共にこの酒を御馳走になつた(但し船津辰一郎先生陪席で)ことがある。筆者の感じでは汾酒が特に他地の燒酒に比して美味いとも思はないが、日本でも酒は灘の生一本といふ通り相場になつてゐて、それよりも美味い廣島や秋田の酒がレッテル價値に於て灘の物に及ばないと同樣、これは一つの「名」であるから仕方がない。この汾酒に關して次の如き傳說がある。



杏花村の酒家で最も有名なのは義泉湧と云ふ屋號の家であるが、そこにある井戸の水が非常に酒を造るのに好いと云ふことになつてゐる。昔一人の老婆が、この井戸の傍で酒店を開いてゐた。

或時見知らぬ道士がやつて來て、酒を飲んだが代を拂はないで歸つて行つた。その後も時々やつて來ては只で飲んで行くのだが、老婆は道士を尊敬して別に酒代の請求もしなかつた。かうしたことが度重つた後、或日のこと道士はいつものやうにやつて來てしこたま飲んでから老婆に向つて「どうもえらく度々酒を飲ませて貰つて甚だ濟まん。お禮をしたいが何分にも無一物の貧乏道士でな」と云ふなり、店を出たと思ふと、例の井戸の處に行つて、飲んだ酒を井戸の中に吐き出した。老婆は驚き且つ怒つてそれを咎めると、

「これでもう酒を造ることは要らん、この井戸の水を汲みさへすれば酒になつてをるでな。おまへさんの親切に酬ひるこれが儂のせめてもの志ぢや」と言つて飄然と姿を消してしまつた。老婆が狐につまゝれた思ひで、その水を汲んで見ると、果してそれは立派な酒である。それから老婆はもとで要らずの酒の泉で、大々的に店を擴げ、二三年の後には大金持ちになつたのだが、後が面白い。その後、又例の道士がひよつこり姿を現して「景氣はどうぢやな」と言ふので、老婆は答へた「そりやもう景氣はおかげさまで、この通り上々の吉でござんすがね。然しね、一つ困つたことには、あれから酒を少しも造らないので、粕が出來ません、それで豚を飼ふのに困つてゐるでござんす。」聞いて道士は「さても測り難きは人の心ぢやわい」と嘆ずるなり默つて去つて行つた。勿論井戸の水はもう酒ではなかつた。

（筆者は華北交業資業局參與）

可園雜記

加藤新吉

今日一月二十日、大寒に入る。急に寒くなつて午前六時の氣溫零下十二度七分。

概していへば北京の冬は大した寒さではない。この冬の如き昨十二月某日の零下十四度を最低として、今日がそれにつぎ、普通は零下五六度まで、南向の窓障子一ぱいに陽がさす日中は室の內外とも槪ねプラスである。暖い日本から眞直に來た人達にはともかく、私共のやうに長く滿洲に住んだ者にとつては暖い樂な冬であり、短かい冬である。立春、今年は二月四日、それが過ぎるとめきめき春らしくなる。

北京では、普通、筒形に積んだ耐火煉瓦を薄い鐵板で卷いただけの簡單な煖爐が使はれる。一二年前までは十圓內外で買へた。物資の不足と物價の騰貴とで今年は驚くべき値段だといふが更に驚くべきは煙突、亞鉛引の鐵板長さ三尺の筒の一節が二圓五十錢、煖爐の五つもつけると煙突代だけで優に百圓を突破する。

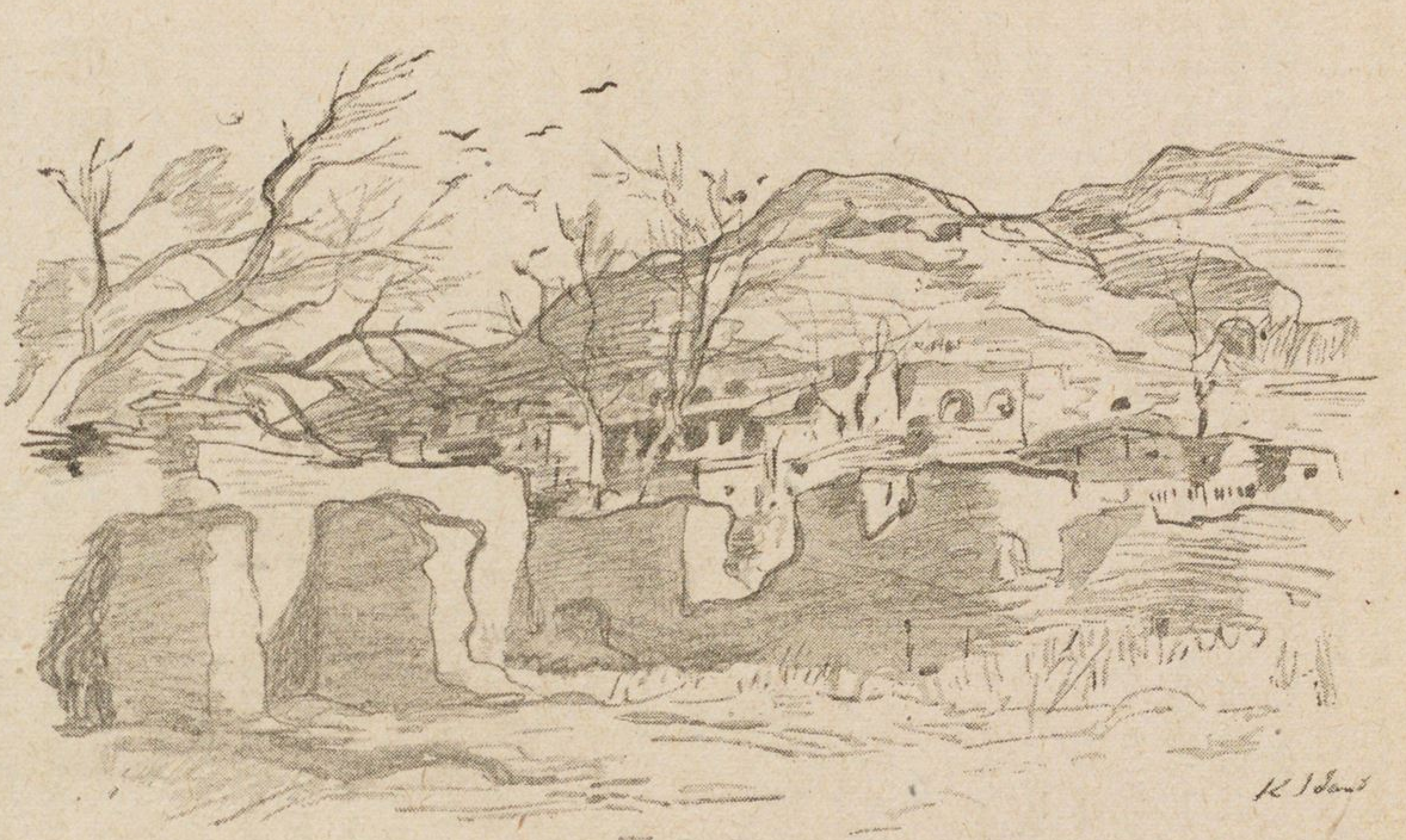
煖爐に焚くのは無烟炭である。尤も煤球兒爐子といふものがあつて、石炭の粉と泥とを固めたどんを焚くこともあるが、日本人には臭くて堪へられないのみならず、動もすると瓦斯にあてられて死んでしまふ。ところで無烟炭は北京に近い門頭溝附近から從來主として運ばれた。近年は山西からも來る。今年は頗る品薄、なかなか手に入らない。統制價格一噸二十七圓、闇だと四十圓位。殆ど全く焔をあげない石炭で火持がよく、朝夕二回バケツ一杯位づゝさし添へて置けば火の消えることはない。劈柴卽ち薪が百斤五圓、噸に換算すれば八十圓以上もするので消したり焚きつけたりすることは禁物である。

趣味的にいへば、丸太や石炭を投りこんで燃える火を樂しむ西洋の壁爐がよく、日本のゐろりの折り焚く柴も捨て難い情趣である。そこになると非美術的な上に火を見る樂みのない此頃の煖爐といふ奴は全く味のないものであるが、それでも程よく溫められた部屋の冬の夜語はまた格別、ついうつかり夜更かしをすることになる。

話の切れ間に表の胡同をふれ歩く物賣の聲が聞える。かういふ時、東京だと鍋燒うどんといふところ、北京では季節によつて色々違つたたべもの賣が銘々特殊の節をつけて呼び步く。この頃だと、落花生、甘大根、熟柿、饅頭の類、糖葫蘆といふ串刺にした果物の飴煮、味をつけた豚肉、何れも宵つぱりの北京人が其儘爐邊でつまむによきものである。

就中、秀逸は柿であらう。本場は萬里長城で有名な八達嶺の南麓附近、十數年前、南口站から驢に騎つて明の十三陵を訪ね、赤玉の枝もたわゝにみのる柿林を見、すべて澁柿であることを憤慨した私達であつたが、それが今頃になると甘味い熟柿になつて居る。外に出して置くとその儘アイスクリームである。爐邊で銀の匙でたべよとは凝り屋の黃子明君が敎へてくれた。

おやもう三更だと誰かが立ち上る。こんこんと木の刳りものを打つて行く打更的、初更には一つ、二更には二つ宛打つ夜廻が三つづゝ打つて通つて行く。外に出ると滿天の星、こぼるゝ寶玉、落ちたらかあんと音がするだらうと思ふやうな星、こんな深い澄みきつた星空は濕度の高い日本ではなかなか見られない。



伊谷賢藏畫・山西省辛置村の穴居村

山西を憶ふ

高岡英夫

山西省の要人―次表に見る様な――の中に多數の日本留學生の居る事は新中國に於ては北支の各省と何等變りはないのであるが、その中に多くの理科系統の學校出身者を見る事は山西省として特に面白さがあると思ふ。

（○印は日本留學生）

○蘇省長―
- 李祕書長
- ○宋民政廳長
- ○宋財政廳長
- 斐教育廳長
- ○張建設廳長
- 白警務廳長
- ○張參事　○趙參事
- ○陸參事　○張參事

例へば蘇省長の藏前出、財政廳長の藏前窯業專攻、建設廳長の駒場農大實科、種畜場長、林業試驗場長の駒場農大出等皆明治末葉より大正初年の日本留學生である。石太線、其他鐵道のなかつた時代に笈を負ひ留學した姿に山西幇の氣質を窺ふ事が出來る。建設廳長から、よく驢馬に跨がりドンキホーテ然として娘子關を越えて壯途に上つた青年時代の話を聞かされたものである。この理科系統專攻の希望は大正初年に於て閻錫山が產業開發に力を入れ技術家の必要を說いたその反映として見る事が出來よう。

この省の社會經濟情勢が未だ熟して居なかつたにも拘らず山西省國際收支の均衡、從つて山西票の價値維持を計るため民國廿四年に立案せられた山西省十箇年計劃、これは全般的には單なる「計劃」として機械的に村落にまで取り入れられたのであつた。結局彼の夢想を裏切り何の成果をも示さなかつたが、部分的には太原附近に集中して居る西化實業公司の諸施設、玩具の樣な經濟單位にもならぬ樣なサムプル工場だけが徐々に民衆生活にも可成り影響を與へた樣であつた。今次の事變を機として抗日の笛に躍らされ或は引きずられた雜軍領袖閻錫山が黃河寄りの片田舍に生活の不便をかこつ時、この小さなサムプル工場が我々の側に充分利用されて居る事も時代の生んだ妙な皮肉である。

中國特有の存在であるかの樣に日本人間に理解されて居る所謂「面子」――山西では特に強く感ぜられるのであ

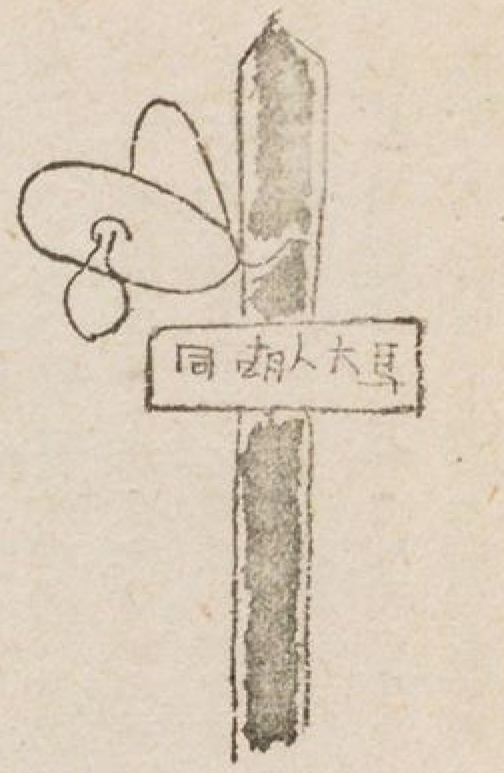
るが——も德川時代の武士階級の間に於て身分格式が重ぜられ人材の登用と極めて狹い範圍にしか行はれなかつたが如き封建的社會秩序の遺制としてのイデオロギーと何等變る所がない樣に思はれる。今尙日本の頑な士族に於て見られるそれである。

山西省に於ては人材の登用を極めて狹い範圍に限定する鄕土閥的な傾向が特に强いのと地理的な關係もさる事ながら山西社會發展の停滯性に從つて封建的な形態が多分に濃く殘されてゐる事に理由があると考へられる。

次に山西に着任した當時、蘇省長から伺つた「知日」觀を披瀝しよう。省長は親日を「親日」派、「知日」派及び「似而非なる親日」家の三つに分けられる。第一の「親日」派は盲目的な親日を意味し指導力を持ち得ないもの、第二の「知日」派は中國の自己批判の上に立ち日本の長所を取り入れ短所には注意をなすといふ樣にお互が切磋琢磨し相携へ更に前進して行かうと云ふ立場に立つもの、第三は政治經濟活動上自己の權利地位等を確保する爲の手段としての立場よりする親日を意味すると云ふのである。省長は確信を以て「知日」派と任じて「知日」派の少きを歎いてをられる。省長は綏遠省政府財政廳長をつとめ、事變前には山西省政府參事として日本側との折衝には常に參劃した俊敏な頭腦の持主であり、日本及び日本人そのものを實によく理解して居られる。かゝる省長を持つ事はひとり省公署のみならず我々の幸福と云はなければならない。現實の事態を基點として、徐々であつても確實にこの幸福を山西人の一人々々に分け與へたいものである。

上述した樣な素晴しい省長を持ちながら省公署の活動はどうしてにぶり勝ちなのであらうか。官吏道の要諦に、「大做大錯、小做小錯、不做不錯」と云ふ俗語がある。これは「大きな仕事をすれば過ちも亦大きく、小さな仕事をすれば過ちも亦小さい、仕事をしなければ過ちはない」と云ふ意味合ひの言葉で官吏たるもの仕事をしなければ過ちなきが故に馘にはならず俸給生活者として安心して生活し得ると云ふ中國の所謂官吏道なのである。中國のお役所は一歩入ればわかる樣に、すべてのテムポは實にゆつくりして居る。それなのに各部屋に入つて見ると筆を持つ者は常に筆を動かし、算盤を持つ者は常に算盤玉を彈いて居て實に忙しさうだ。然したゞ筆を動かし或は玉を彈くと云ふ運動だけがある樣だ。そこからは何も出て來ない。「擦桌子」と云つてお役人は役所で机を磨くのだと云ふ言葉さへもある次第。かう書いて來ると一見無能力者の集りの樣にも見えるが彼等は素晴しい特殊技能の持主である。即ち統計數字をものゝ美事に作り上げる才能である。日本人の樣に何でも數字がなければ承知の出來ないものにとつてはとてもよい相手方である。試みに農作物の作付面積や各作物別の收穫高につきお尋ねになるが良い。直ちに一の桁或は小數以下までの統計表を作成して頂ける。實に便利である半面殆ど凡ての支那研究家の頭を惱ませる素となつて居る。彼等にその內容を突込んで聞いても、無いものを無理に作成させたのだからどんなものでもあれば結構でせうと何事もなかつた樣な返答をされる程の强心臟の所有者である。退廳時になると微風の如く靜かに引き上げて行く。卅日この運動が續くと俸給が支給されるのである。かくの如き官吏道を新中國への道に導く事は並大抵の努力ではなし得ない。赤區陝西を對岸に控へ又省內未だ國共兩軍の蠢動する時彼等と鬪爭して居られる省長初め省公署道縣連絡員各位の奮鬪と健康を祈ること切である。

（筆者は滿鐵北支調査所員）



北支暢談

鐵道のはじまり

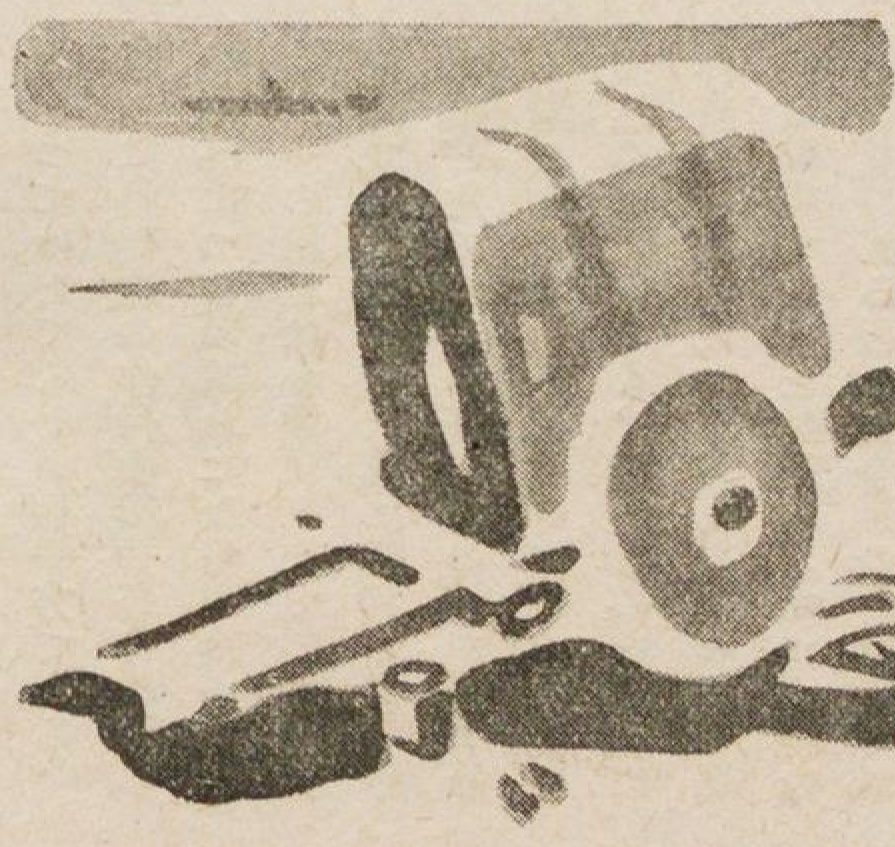
事變後北支・蒙疆の鐵道は自動車、水運と共に擧げて華北交通會社によつて經營され、事變直前における舊北支鐵道總營業キロの九六パーセント卽ち五千七百キロがその經營下に入り、殘るは隴海線の開封以西のみとなつたが、支那にはじめて鐵道建設の議が持ち上つたのは、今から七十八年前――同治三年である。この年に英人ステフェンソンが印度より支那に來り、上海・蘇州間の鐵道敷設を提議したが全然相手にされず、翌四年七月に英商トラントが北京の宣武門外に、長さ一支里の鐵道を設けて試運轉をやつた。これが支那に鐵道の輸入されたはじまりである。

ところがこの火煙を吐く汽車の試運轉を見た一般民衆は大いに驚愕し、いろいろな流言を飛ばすので、政府はたうとう軍隊を派遣して之を取り毀してしまつたと云はれる。

その後約十年を經て、英商ジャーデン・マジソン公司が上海・吳淞間の鐵道敷設を建議し、光緒二年一月第一回の運行を行つた。當時の記錄によれば、一週間の收益は二十七磅であつたと云ふ。ところがこれも惜しいかな前と同じ理由で、光緒三年九月支那政府は二十萬五千兩を出して之を買收し、軌條も車輛も悉く臺灣の高雄港に運んで海底に沈めてしまつた。今から思へば狂氣の沙汰ではあるが、當時政府の役人達がいかに科學の怪物に對して恐怖を抱いてゐたかが想像される。

*

その後支那人中にも鐵道敷設の必要を悟る者があり、一年後北支の唐山より胥各莊に至る鐵道（今の京山線の一部）が計畫され、光緒六年に至り漸くその建設が許された。しかし、この鐵道には機關車を用ゐることが出來ずして騾馬を用ゐると云ふ條件附――所謂馬車鐵道として許されたのである。この時のゲージは四呎八吋半、後の支那鐵道ゲージの標準となつた。光緒八年には唐胥鐵道の英人技師キンダーによつて小型機關車が作られた。これが支那で作られた最初の機關車である。又光緒十一年にはキンダーの建議によつて開平鐵路公司が新たに設立され、唐胥鐵道を買收すると共に路線の延長を計畫した。この開平鐵路公司は支那に於ける鐵道會社の濫觴であり、今の京山線（北京――山海關間）の基礎をなしたのである。



纏足

纏足は、赤ん坊のうちに切布で足首をかたく結んで、大きくならないやうにするのであるが、この古い風習から支那の女性達が全くぬけでることが出來たのは漸く民國に入つてからで、それ迄は纏足をしない婦人は、嫁にも行けぬ程であつた。民國前、蒙疆の大同附近では日を定めて纏足の競爭が行はれてゐたと云ふ。その日になると婦人達は各戶口に出て男達のやつて來るのを待ち、纏足をなげ出して批評を受けるのである。纏足には蓮瓣新月、和弓、竹萠、菱角の五樣式があり、肥、秀、軟を三貴とした。

纏足の起りははつきり分らないが、南唐の宮中で一宮女が舞を舞ふ時に足首を小さくくくり、三日月のやうにして舞臺に立つたのが評判となり、だんだん足を小さくする風が流行して來たと云はれてゐる。

四庫全書

淸の康熙・乾隆の兩帝は戰が好きであつたばかりでなく、文化政策に對しても大いに力をそそいだ。

康熙帝はその治世六十年の間に康熙字典を始めとして、支那四千年來の王道を以て未曾有の領土を擴大した經緯の說明とも云ふべき「大淸一統志」、歷代の法律制度を集大成した「大淸會典」、又その文化の發揚統一を目的とした「淵鑑類函」、などつぎつぎに刊行され、更に雍正の代には一萬卷に達する「古今圖書集成」、乾隆の代に至つてつひに「四庫全書」が完成された。

支那では本の種類を大きく分けて經

史、子、集の四つになつてゐるが、この「四庫全書」と云ふのは當時あつた經史子集のあらゆる重要な書物をまとめた大叢書で、全部で三萬六千餘册、二百二十餘萬頁といふ大げさなもの。この編纂には三百餘名の學者が十年の年月を費し、全部肉筆で書かれ、北京宮中の文淵閣、北京西郊圓明園の文源閣、熱河行宮の文津閣、奉天行宮の文溯閣に分藏し、ついで閲覧用としてやや小型の三部が揚州大觀堂の文滙閣、鎭江金山寺の文宗閣、杭州西湖行宮の文瀾閣に分藏された。現在完全なものは三部しか殘つてゐないといふ。

白蓮教

支那の祕密結社の雄として中南支に發達した紅幇、青幇に對して北支那――主として黄河流域に發達したものに白蓮教がある。白蓮教の歴史は古く――宋朝末期に朝廷を援助する目的のために起つたが、間もなく元朝に至り倒元興宋の廉によつて甚しい壓迫を受け、そのため祕密結社の組織を取るに至つたのである。

その後白蓮教は幾多の支派を出したが淸の光緒末になつて大刀會・小刀會・紅槍會・義和團の有力な四派が生れた。義和團は當時の排外運動の波にのつてドイツ公使、日本公使館員を殺害してあの有名な義和團事件を捲起したのである。民國革命後は白蓮教の勢力衰へたりとはいふものの義和團を除く三派は依然として義氣を失はず、今日でも尙その潜勢力は爲政者の注目を惹きつゝある。

*

白蓮教の特徴は拳法を習ふのと、咒文を唱へ、行を修して、彈丸を避け、刀でも切れない術を會得することで、その記號としては赤布を頭に卷き赤布を身に纏ふことである。山東省・河南省の主なる白蓮教分派及びその流れを汲んだものを擧げて見れば左の如くである。

山東省

大刀會　小刀會
紅沙會　黃沙會
紅纓會　焦纓會
紅旗會　白旗會
紅槍會

・河南省

紅槍會　黃通門
黃教會　纓槍會
天理教　八卦教
劉義會　紅燈罩

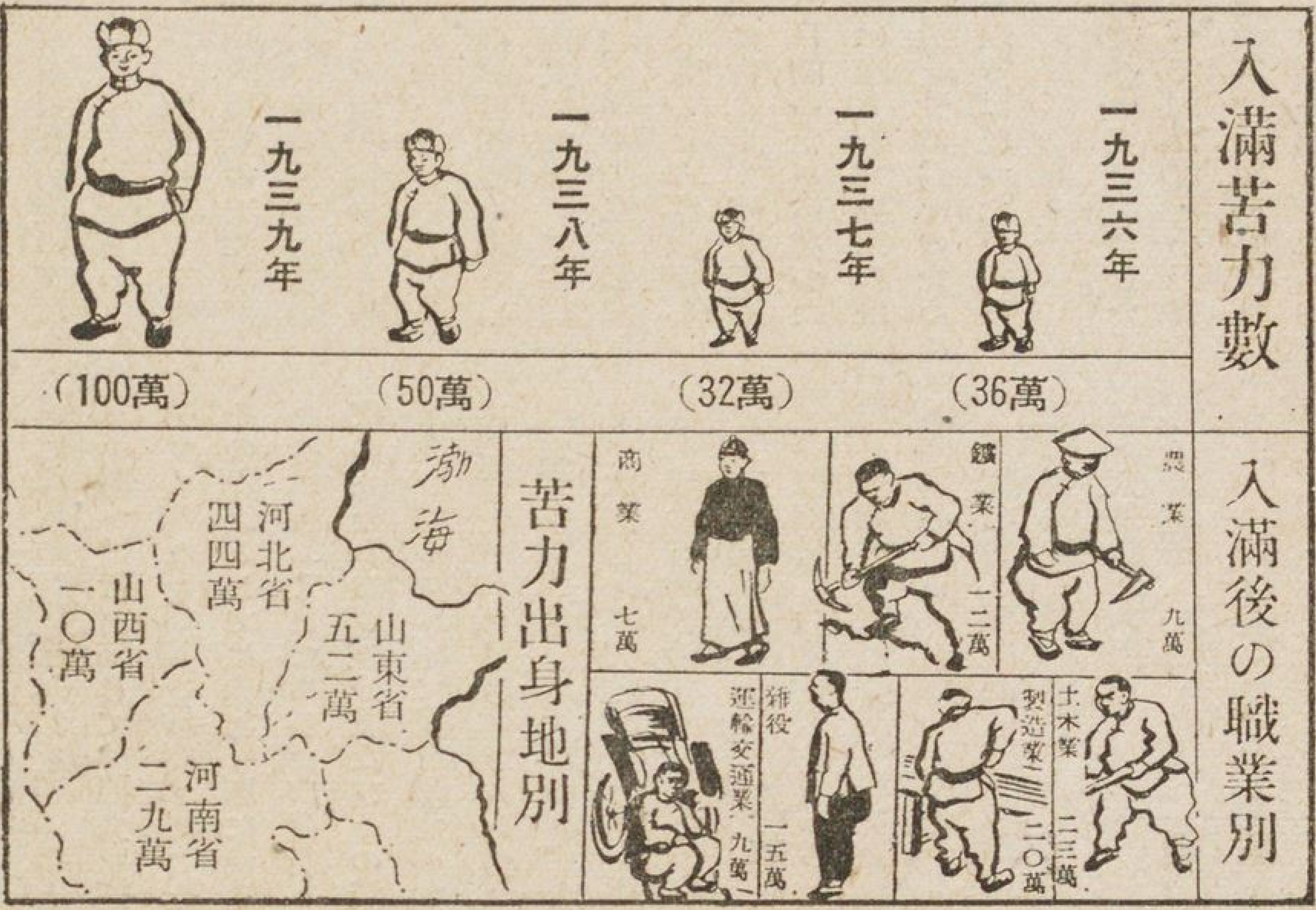
辮髮

淸の世祖は吳三桂の降服をうけて北京に入城することが出來たが、なにしろ滿洲から出て來た田舍者――文明のずつと進んでゐる漢民族を治めるには色々と苦勞をした。流賊李自成を平げて明の仇を討つたのだと云ふ苦しい云譯けをやつたり　明の皇帝のお祭や　漢民族に人望のあつた孔子の廟を修繕して、その子孫を優遇するなどいろ〳〵のことをなした。しかしそれだけでは漢民族に對する威光を示すに足りないとして、漢人達に滿洲人の風俗であつた辮髮――あの頭のまはりを剃つて上に毛を殘しだらりと長く結つた――を强制したのである。ところが漢民族の方では今まで野蠻人だと思つてゐた滿洲人のまねをするのだから大變である。この樣な新體制があるものかとなかなか命令を聞かうとしない。一方淸朝では命令を出した以上その體面にかゝはるので辮髮しない者は死刑に處するといふことにした。そこでこの辮髮の風はいつの間にか支那全土に行き亙り、支那人と云へばあの髮かとさへ思はせ、日本人からは「チヤンチヤン坊主」の有難くない名前まで頂戴するに至つたのである。

この辮髮令は勿論民國革命後廢止され、今日辮髮してゐるものは殆んどなく、片田舍に一部殘つてゐるくらゐのものである。

華工（苦力）

北支・蒙疆の統計 8



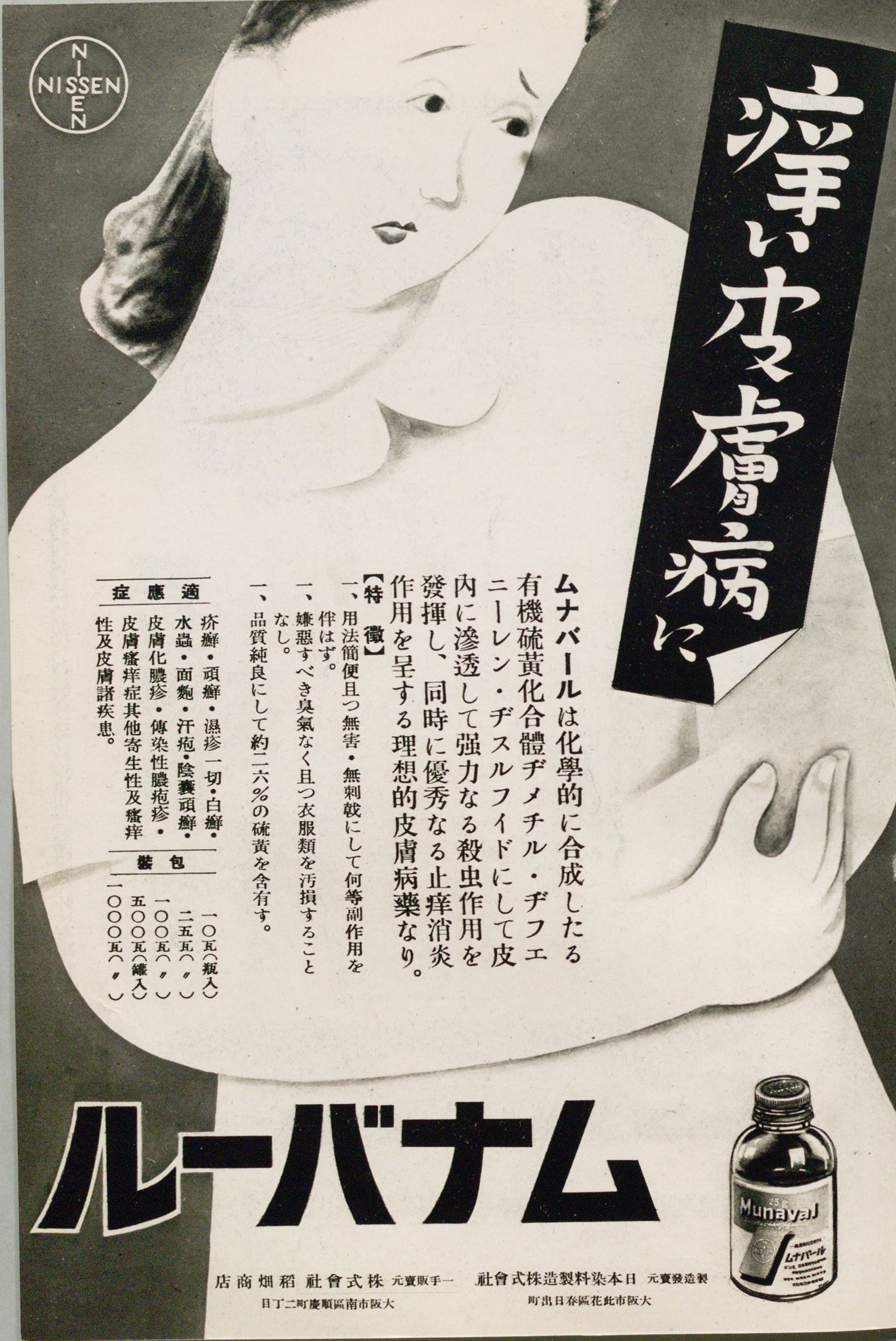
現在滿洲國では産業開發に必要な勞働力の不足を補ふため、毎年百萬餘の苦力を北支に募集してゐるが、これらの苦力達が一ケ年に持ちかへる金額だけでも驚く勿れ二千萬圓を超えるといはれる。この苦力送金が聯銀券の價値を脅し、滿洲、北支間の爲替決濟並に資金交流關係を不圓滑にすると云ふので、最近その送金額を制限された程である。苦力の力また恐るべしといふべきであらう。

支那の苦力が世界的に有名になつたのは歐洲大戰の頃からである。支那も列國に伍して聯合軍に參加したのであるが、支那の爲すべき役割として軍事的には何物もないので苦力を歐洲に送つた。ところがこの苦力軍は聯合軍に大いに役立ち、絶讚を博したまではよかつたが、ロシアに派遣された苦力達は、たうとう共産主義の洗禮を受け凱旋後共産黨に參加し、或者は土匪の群に投じて仕舞ひ掠奪暴行を行つた。當時外人の人質事件が頻々と行はれたのも、みなこれ等苦力達の仕業であると噂された。歐洲大戰に於ける支那勇士の末路が以上の樣になつたのも支那でなくては見られない珍悲劇である。

苦力の主産地は山東、河北省で、特に山東苦力の名は普く世に知られてゐる。河北省や山東省は支那で最も古くから開けた所で見渡す限り開墾せられ林野も荒蕪地も殆んど見られない。また人口密度は全支那の平均一平方粁四十人に比して河北省は六倍强の二百四十六人、山東省は五倍半の二百二十一人に達してゐる。現在人口問題を云々されてゐる我國の人口密度百七十三人に比して之を遙かに凌駕してゐる。また渡滿希望者の六割三分は五畝乃至二十畝の土地を持つてゐるが一割六分は一片の土地も持つてゐない。北支では一家が最底の生活を營むためには二十畝は缺かされぬといふから、苦力の八割までは正に飢餓線以下の極貧者であることが窺へる。農村のかやうな狀態が過剩勞働力の無盡の温床となる。

本年度の入滿苦力は約百十萬と見られてゐる。この内の八十萬が鐵道經由入滿するものとし、三月から四月とその移動期を控へた華北交通會社では特別に苦力輸送の貨物列車を編成、濟南を始發として、東滿や北滿の需要地まで直通列車を送り込まうと種々な對策が考究されてゐる。

昭和十六年二月十五日印刷納本
昭和十六年三月一日發行
編輯者 北京・華北交通株式會社 資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
三月號（毎月一回一日發行）
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房 振替東京 六四二三番 電話九段（33）一四一五番 三三四四番
一册定價㊞三十錢（郵送料一錢五厘）
一ケ年分 金三圓六十錢
廣告取扱 大阪市西區京町堀上通一丁目二五 一手取扱所 一新社 電話土佐堀九三九


NISSEN
痒い皮膚病に
ムナバールは化學的に合成したる有機硫黄化合體ヂメチル・ヂフエニーレン・ヂスルフイドにして皮内に滲透して强力なる殺虫作用を發揮し、同時に優秀なる止痒消炎作用を呈する理想的皮膚病藥なり。
【特徴】
一、用法簡便且つ無害・無刺戟にして何等副作用を伴はず。
一、嫌惡すべき臭氣なく且つ衣服類を汚損することなし。
一、品質純良にして約二六%の硫黄を含有す。
適應症
疥癬・頑癬・濕疹一切・白癬・水蟲・面皰・汗疱・陰嚢頑癬・皮膚化膿疹・傳染性膿疱疹・皮膚瘙痒症其他寄生性及瘙痒性及皮膚諸疾患。
包裝
一〇瓦（瓶入）
二五瓦（〃）
一〇〇瓦（〃）
五〇〇瓦（罐入）
一〇〇〇瓦（〃）
ムナバール
Munaval
25g
ムナバール
製造發賣元 日本染料製造株式會社
大阪市此花區春日出町
一手販賣元 株式會社 稻畑商店
大阪市南區順慶町二丁目

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十六年二月十五日印刷納本 昭和十六年三月一日發行（毎月一回一日發行）第二十二號

北支 ㊄ 定價 三十錢